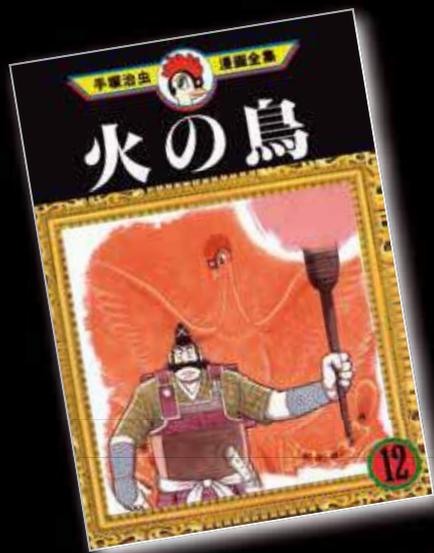


「漫画の神様」  
手塚治虫のルーツは  
信州上田にあった!!

令和3年度増補版



アトムの子



上田市～塩田平周辺地図

至諏訪・松本  
↓



須川手塚家祖先の墓所



## 漫画の神様

# 手塚治虫のルーツは信州上田にあった

漫画の神様と言われた偉大な手塚治虫先生。誰でも知っている「鉄腕アトム」「ジャングル大帝」「火の鳥」等、漫画に新しい技法を取り入れたり、又ストーリーも壮大で、大人も子どももみんな楽しんで夢中になった。あの漫画を描いた作者です。

私はその「神様」といわれた手塚治虫先生に直にお会いして、お話をすることがあるのです。

いまからもうだいぶ前のこと、一九八三年（昭和五十八年）の夏のことです。

先生は私にとってもやさしい笑顔で「どこからいらつしやいましたか」とお聞きになりました。私は「上田から来ました」と答えましたら、先生は「私の先祖は上田で、お墓もあります。時々墓参りに上田へ行きますよ。」

私は腰が抜ける程驚きました。当時私は私もまだ若く、神様といわれる大先生に恐れ多くていろいろお聞きできませんでした。

上田市の塩田に手塚という地籍があり、友人もいましたので聞いてみましたが、みんな「そんな話は聞いたことがない」といいます。市役所に行って

方々を尋ねてみましたが、知らないという。途方に暮れて何十年もそのままにして置いたのですが、三年程前に手塚治虫先生のルーツは「木曾義仲に仕えた武将、手塚太郎金刺光盛である」という詳細な調査をまとめた書籍が出版されました。著者は現アトムの会代表の上原榮治さんで、間違いなく私が手塚治虫先生からお聞きした内容が書かれていました。

このような縁で、私がアトムの会の会長をお引き受けした次第です。

手塚治虫先生のご子息の眞様も、もう何回も上田へ来られ、すっかり顔なじみになり、令和元年十一月二十九日には上田東小学校六年生の子ども達に「父手塚治虫について」という講演をしてくださいました。

今後、このような結びつきを更に密にして、漫画の神様手塚治虫先生のルーツは上田にあり、という発信を大きくし、かつ盛大な顕彰ができることを切に願っています。

アトムの会会長 宮下 貞夫

## アトムの会決議

上田駅新幹線の発着時に「鉄腕アトム」のテーマ曲を採用して頂けるよう行政（上田市）にお願ひしてゆきたいと思ひます。

現在「鉄腕アトム」のメロディーが流れているのは次の三駅です。

阪急宝塚駅今津線

東武東上線新座駅

山手線高田馬場駅

「鉄腕アトム」のテーマ曲を流すためには、行政（上田市）からJR東日本への申請が必要となります。又数十万円の初期投資と月々ジャスラック（一般社団法人日本音楽著作権協会）への支払いが必要となります。（千円前後と思われまます。）何とか実現したいと考えています。

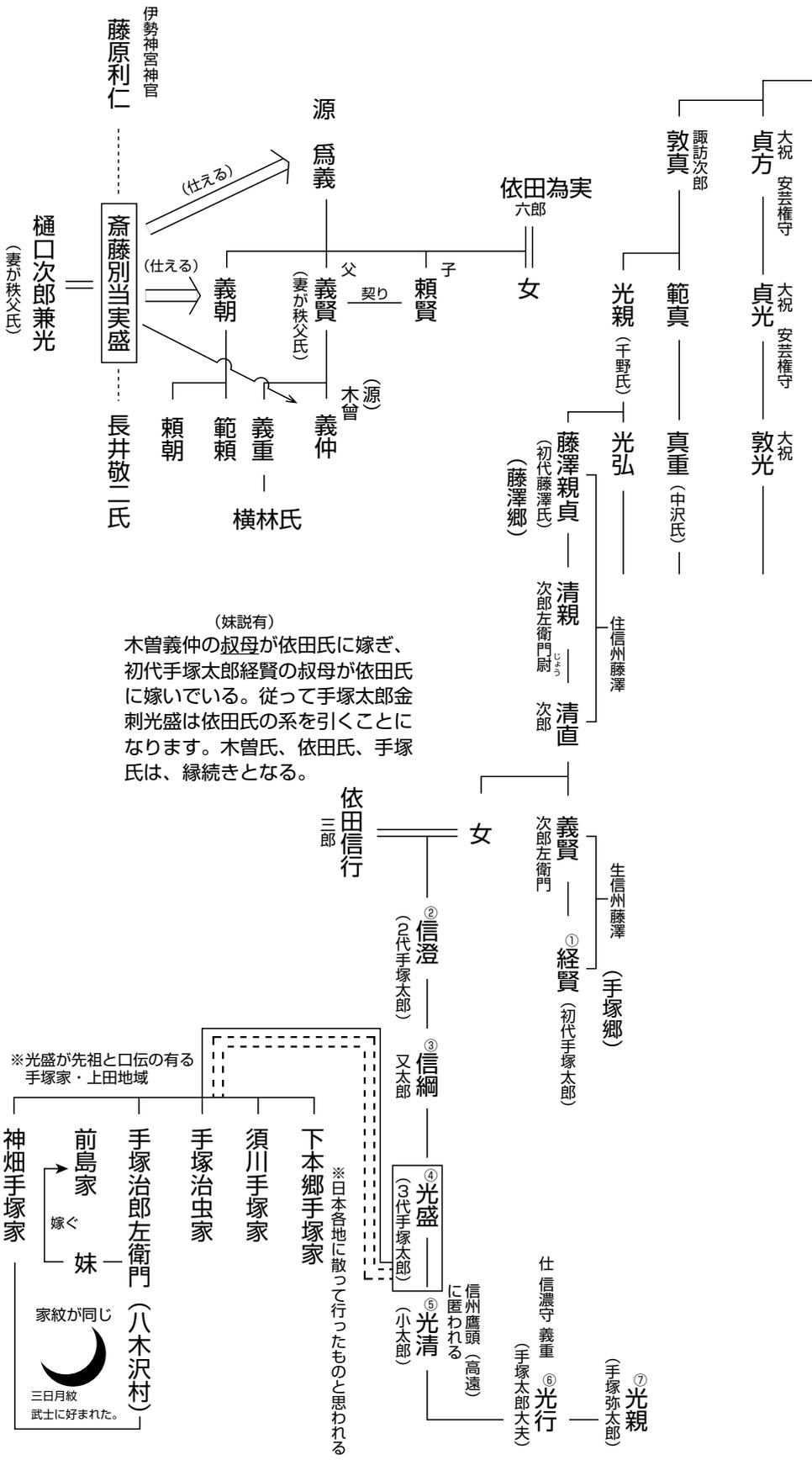
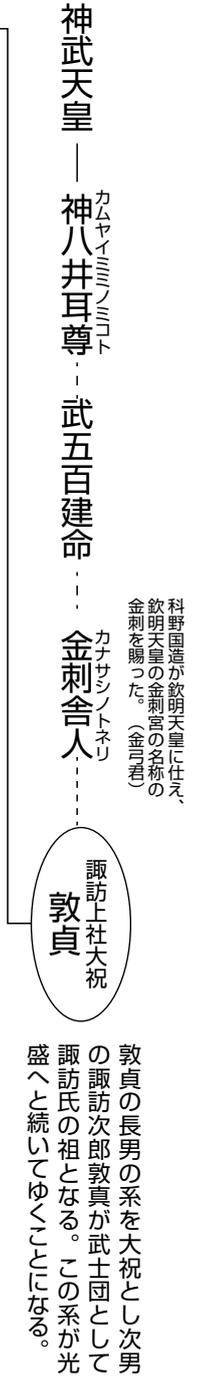
+++++

令和元年十二月二十四日、アトムの会顧問、丸山瑛一先生が急逝されました。先生は電子技術者として大変な業績を残されました。当会にも数々の貴重なアドバイスを頂いております。ここに生前のご支援に感謝すると共に、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

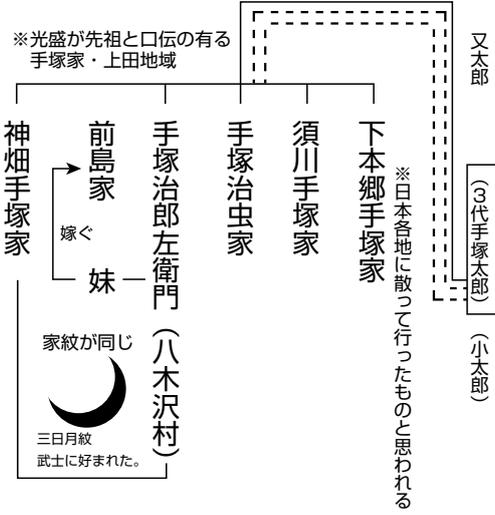


表紙写真  
左から  
種村国夫  
手塚治虫  
赤塚不二夫  
杉浦幸雄  
の各先生方  
昭和58年（一九八三）於長野県白馬村  
宮下貞夫 撮影

「阿蘇氏系図」・「金刺手塚系図」・「手塚氏畧系」・「尊卑分脈」・「信濃勤皇氏功」の「神氏系図」市村成人著 .. 参照



(妹説有)  
木曾義仲の叔母が依田氏に嫁ぎ、初代手塚太郎経賢の叔母が依田氏に嫁いでいる。従って手塚太郎金刺光盛は依田氏の系を引くこととなります。木曾氏、依田氏、手塚氏は、縁続きとなる。



# 手塚治虫の先祖「手塚太郎金刺光盛」について

てづかのたろうかなしのみつもり  
手塚太郎金刺光盛とは

## 光盛の妻

光盛は、遅くとも平安時代末期の十二世紀半ばには生を受けていると思われる、木曾義仲を三十年にわたって庇護、支援した武将である。そして、一一八四年粟津に討ち死にしている。また、『平家物語』の「実盛」の章に斎藤別当実盛を打ち取ってしまう武将として描かれており、これは、「俱利伽羅峠の戦い」後の「篠原の合戦」の出来事である。「実盛」として能の演目になっている。

## 金刺姓

東京大学名誉教授石井進氏によると「三枝氏系図」から、甲斐国（山梨県）国衙の役人、三枝野呂守明の娘と判明している。「三枝氏」は神武天皇に仕えて功績をあげたことにより、神武天皇の皇后の名前「サキグサ」（ユリの花の意）を頂き、「三枝氏」となった逸話を持つ歴史がある一族である。

近年、櫻井松夫先生の調査、研究によつて光盛は上田市手塚地区（平安時代には手塚郷と呼ばれた）の開発領主であつたとの説が提示された。光盛の居館跡、供養塔、光盛の菩提を弔つたと思われる光盛寺跡等のゆかりの地が数多く残っていることを桜井松夫先生は指摘されている。この説に対して、光盛は諏訪の人と主張されてきた研究者から厳しい反論があつたことである。これは光盛が諏訪大社下社の大祝（神職の最高位）を務めていたことが影響しているものと思われる。しかし、光盛の上田市手塚説は『三枝氏系図』によつて、揺ぎないものとなつた。

五百建命とする論文を書かれている。

## 依田氏との関係

藤澤氏は諏訪大社上社を出自とし、藤澤地籍の（諏訪から高遠に通じる杖突街道のほぼ中間に位置する）開発領主となり、その曾孫娘は依田氏に嫁ぎ、また玄孫の経賢は上田市手塚郷に進出して開発領主となつた。しかし急死したため、依田氏の系を引く依田信澄が手塚を継いだ。そして信澄の孫が手塚太郎金刺光盛である。

また、この依田氏に木曾義仲の叔母が嫁いでいることから、手塚氏・依田氏・木曾義仲は縁続きとなつている。

## 漫画家手塚治虫氏

木曾義仲死後の上田市手塚郷の手塚氏は、家・屋敷・田畑全て、源頼朝に没収されるうきめをみた。塩田平周辺に命をつないだと思われる手塚治虫氏の祖先手塚吉兵衛氏は戦国時代末期依田信蕃に仕えていた。しかし、残念なことに「岩尾城の戦」で依田信蕃は戦死してしまつた。信蕃は非常に徳川家康に信頼されていたため、彼の死後もその一門は「康」の字をもらつて厚遇されている。

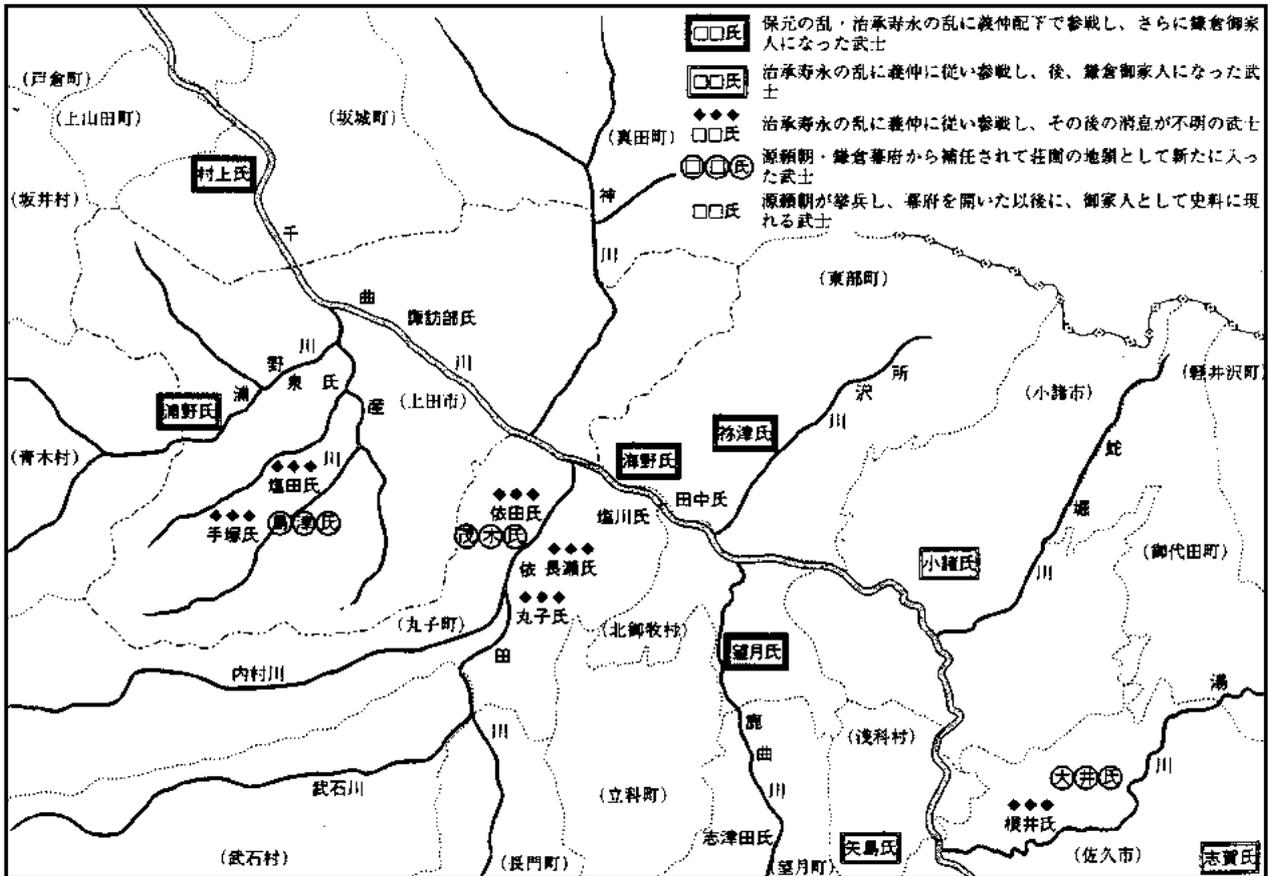
## 現存の流鏑馬道

上田市西前山の塩野神社から一直線に伸びる道で、流鏑馬が行われたものと思われる。付近には流鏑馬に関する地名、地籍が残っている。光盛・盛澄等はこの地で流鏑馬の技を磨いたものと考えられる。諏訪大社下社秋宮の流鏑馬道（現下諏訪中学校周辺）は市街化し、春宮のそれは、諏訪湖に向かって延びる大門通りが想定されている。

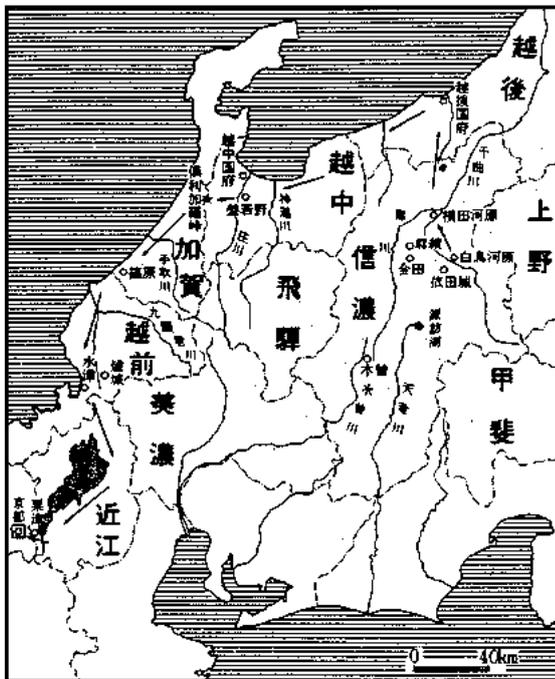
信濃国造、武五百建命（神武天皇王子の神八井耳命五世孫）の後裔金弓君が欽明天皇の磯城島金刺宮に供奉して金刺舍人直姓を頂いたことからその後裔は「金刺姓」を用いるようになった。金弓君（神八井耳命十三世孫）の子目古君は、敏達天皇の詔語田幸玉大宮朝に供奉し、「他田直姓」を頂いた。

長野西高校近くの「湯福神社」と権堂近くにある「武居（武井）神社」の宮司は西門の斎藤家、東門の斎藤家と呼ばれているが、本姓は金刺である。また東大名誉教授・義江彰夫氏は、長野県千曲市にある森將軍塚古墳の被葬者を、武

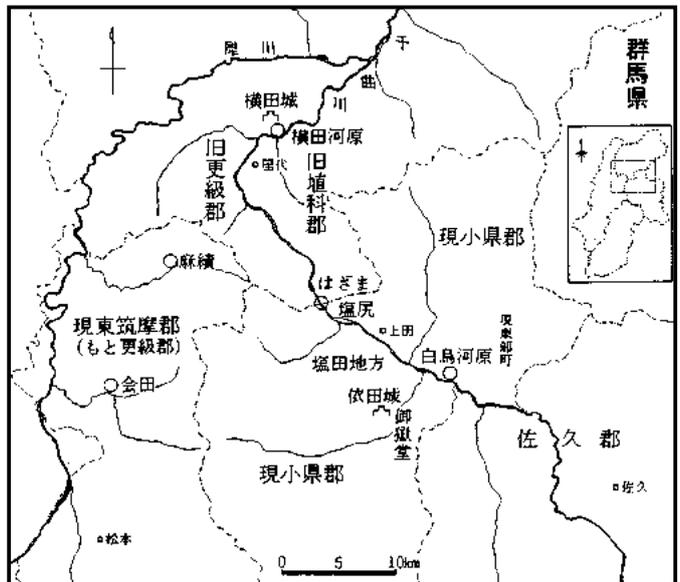
十二世紀後半の上田市周辺の開発領主の浮沈と木曾義仲の挙兵、進軍資料



上田市誌別巻 (1) 上田市および周辺地域の12世紀後半における開発領主の浮き沈み



義仲の京上進攻図



義仲の挙兵関係図

長野県史 通史編第二巻

八木沢天満宮・義仲古碑



▲八木沢天満宮鳥居



上：拜殿石段左に有る石灯籠

下：石灯籠の側面 刻まれた三つ盛亀甲紋  
(手塚光盛の家紋と伝わる)

(——高寺祥一氏の指摘により存在を確認)

正面には仏と馬の彫り物



▲三つ盛亀甲紋の有る祠(裏面に手塚光盛と刻まれている——筆者確認)

朝日將軍木曾義仲公の古碑

銘文によれば義仲公の五百五十回忌に当る江戸時代の享保十七(一七三三)年八木沢村の治郎左衛門が建立し、はじめ甲平という所にあつたが、その後法輪寺裏に移された。  
治郎左衛門は系譜の確証はないが、手塚氏の子孫と伝え、小松氏を名乗っていた。  
平成六年に天神社境内に移転する。

碑文  
表面

寿永三甲辰天正月二十一日

朝日將軍義仲公大居士

風院玄光信士同年二十三日 手塚太郎光守

裏面

施主二十代孫 手塚氏治郎左衛門

左側

浄室信戒信士 二十一日今井四郎兼平

天院且高信士 同年同日 二十三日樋口治郎兼光

右側

為ノ木曾義仲公並御家来中也

泰造建立百体

凡至享保十七年任年五百五十回向



# 「漫画の神様」手塚治虫氏のご先祖

手塚吉兵衛君靈碑 信州上田別所温泉安楽寺 蔵



手塚吉兵衛君靈碑 内厨子



内厨子真鍮飯の銘

婦一 侶僧道不禪定門 寛永十五年戊寅歳九月五日死  
婦一 菊窓妙光禪定尼 慶安元年戊子歳九月二日死

侶僧道不禪定門及び菊窓妙光禪定尼、右禪定門俗称は吉兵衛、手塚の府君、金刺光盛の裔になり、其の子盛行は弥兵衛と称す、寛永中 水戸威公に仕う、其の次子盛方は藤内と称す、出でて松平播州候に事えて別家と為る、乃ち我が家の祖なり、今茲に安政丁巳夏、搜索して斯の靈牌を信州上田別所村安楽禅寺に拜し得たり、因つて新に厨子を作り月牌料を副えて、再び之を祠堂に納む。

手塚藤内五代の孫 長沼侍医 手塚良仙光照謹誌

安楽寺 若林恭英ご住職読み下し

外厨子内側の銘

手塚吉兵衛君靈碑 外厨子



手塚吉兵衛君靈牌記

光照孫 大槻徳裕謹書

君姓は、金刺氏、諱は某、手塚太郎光盛の後裔たり、信濃手塚邑に世居す、天正中、田中城主芦田右衛門信蕃(のぶしげ)に仕う、後出、幕府の先手与力為り、某氏を娶り、四男一女を生む、長は武兵衛、禄を襲いて与力と為る、次は清左衛門、小濱候に仕う、次は弥兵衛盛行、寛永中に水戸威公に仕う、光照六世の祖為り、次は弥五衛門、幕府の小普請隊に属す、季女は小濱候の臣、加藤某に嫁ぐ、某氏後君十一年、慶安元年戊子九月二日を以て卒す、蓋し光照、祖先の履歴を知らんと欲す、有年於此、然歲月遼闊にして道路隔遠たり、其の審を得る無し、安政四丁巳春、義子の光政を使わして之を故土に遍く求めしむるに、終に信州別所村安楽禅寺に靈牌を拜し得たり、然るに墓地は其の詳を得ず、恨むべきなり、今幸いに靈牌を修せずして之を新たにせんずば、何を以つてか後來に示さんや、因つて新に厨子を作り、金を寺に寄せたり、若干且つ記して歲月右の如し。

安政四年丁巳春三月 七世孫 長沼侍医 光照謹記

安楽寺 若林恭英ご住職読み下し

仁

後生為

手塚吉兵衛君靈牌記

世居

君姓金利氏諱某為手塚太郎光盛後裔也信乃手塚也

天正中<sup>②</sup>田中城主<sup>③</sup>芦田右衛門信蕃<sup>④</sup>幕府先

手與力脱羅官歸其<sup>⑤</sup>以<sup>⑥</sup>十五年茂原九月五日卒娶

某氏生四男一女長武兵衛襲祿為與力次清左衛門仕小

濱原次孫兵衛盛行寬永中仕<sup>⑦</sup>水戸公<sup>⑧</sup>即為光昭六世

祖次孫五右衛門仕<sup>⑨</sup>幕府屬小普請長隊孝女嫁小寶臣

加藤某某氏後君十一年以慶安元年戊子九月二日卒蓋

光昭欲知祖先後歷者有年於茲然歲月遼闊道路隔絕得

其審<sup>⑩</sup>安政四年丁巳春使義子良齋光政通求之於故土

終得拜靈牌於信州別處村安樂禪寺然墓地不傳其詳可

恨矣余幸得靈牌來修而新之何以示後來哉因新作額子

寄金持寺若干且記歲月如右

安政四年丁巳春三月

七世孫<sup>⑪</sup>長治侍禮光昭謹記

光昭孫 大槻德裕謹言

光昭孫 大槻德裕謹言

① 一五七三〜一五九三

② 駿府（現在の静岡県）に在った。

③ 依田姓も名乗る。手塚吉兵衛氏も芦田右衛門信蕃も元を辿れば同族である。

④ 先手組、江戸幕府の職名、弓組、鉄砲組に分かれており、先手頭のもと与力、同心で組織されていた。若年寄に属し江戸の治安維持にあたった。

⑤ 寛永十五年（一六三八）

⑥ 手塚吉兵衛氏三男、医者。常陸水戸藩初代藩主徳川頼房に仕える。江戸時代から「三代続いた医者が御三家藩主の待医となつたのは余程優秀だったことの証と思われ。

⑦ 常陸水戸藩初代藩主。徳川家康の十一男。

⑧ 一八五七

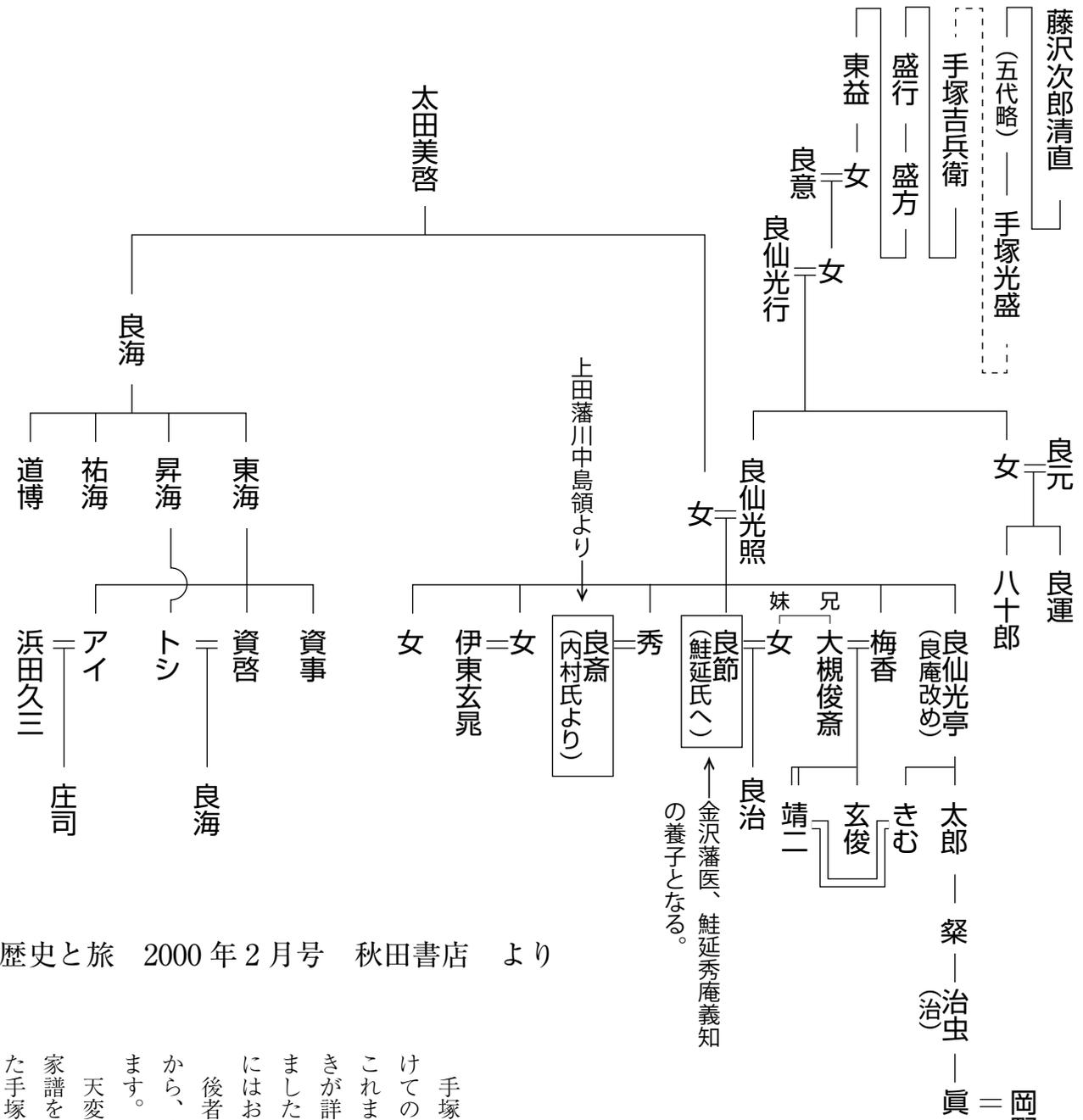
⑨ 川中島（上田藩とび地領、一万石。現在の千曲市）出身の内村総兵正弘の息子政富。手塚良仙光照の娘秀と結婚。医者。

⑩ （一七〇一）常陸水戸藩二代藩主徳川光圀（水戸黄門のモデル）の死去をいたみ、「御連枝」として創設された藩。石高は二万石。参勤交代は免除されていた。少石高ではあるが、家格は高かった。現在の茨城県石岡市にあたり、府中領と長沼藩から成り、府中藩と呼ばれた。お殿様は江戸住いであつたので、手塚良仙光照氏も江戸に住んでいたはずである。

⑪ 大槻俊斎の息子、大槻徳裕（玄俊）手塚良仙光照氏の孫。医者。

# 手塚治虫（治）氏の略系図

深瀬泰旦氏作成 上原榮治加筆



歴史と旅 2000年2月号 秋田書店 より

岡野玲子 (鮭延氏筆頭家老、鮭延秀綱の娘婿、岡野九郎左衛門の子孫)

手塚治虫氏ご子息、手塚眞氏より平安時代から鎌倉時代にかけての系図と江戸時代の家譜の写しを頂いております。前者はこれまで非公表とされている物です。拝見しましたところ添書きが詳細で、従来の研究を更に補強、進捗する内容となりました。高い信頼性を持つ第一級の資料である旨を、手塚眞氏にはお伝えしてあります。

後者の江戸時代の家譜については非公表の制約はありませんから、内容に沿って手塚治虫家の歩みを辿る事にしたいと思っております。

天変地異、戦争、転勤等のなか、何百年もこれらの家系図、家譜を保持されたことに敬意を表すると共に、その写しを頂いた手塚眞氏に感謝するものです。

# 手塚治虫家の系図から読み解く

(1)手塚治虫家系図によれば、その祖は信濃国(長野県)藤澤郷(諏訪から桜で有名な高遠城に通じる杖突峠のほぼ中間に位置する)から起こった藤澤親貞としている。八代目の手塚太郎金刺光盛は「平家物語」や「源平盛衰記」にみえる。養和元年(一一八一)の木曾義仲挙兵時にはその陣営にあつたが、元暦元年(一一八四)粟津にて戦死している。

去。(一五八三)時に二十才とする(一六三八)に死亡しているので七十五才。信蕃戦死時に二十五才とすると八十才で死去となる。当時としては長寿の方だと思われる。次に吉兵衛が仕官した「先手与力」について著すことにする。

## 先手組

①武官である。北町、南町奉行所は司法、行政、立法を合わせた文官である。

(2)光盛の子孫手塚吉兵衛は、信濃国手塚郷(長野県上田市手塚)に在り、天正年間(一五七三〜一五九三)には徳川家康の将依田右衛門信蕃(駿河田中城主、手塚吉兵衛と同族)に仕えた。信蕃は加津野信昌(真田昌幸の弟)と共に真田昌幸を説得して家康に属させる等の働きにより、家康の信頼が篤かった。その一族は家康より松平姓や康の名前を与えられ、それは江戸時代も続いていた。残念ながら天正十一年(一五八三)信濃国(長野県)佐久郡平定のおり、岩尾城攻略時に戦死している。こうした経緯から慶長八年(一六〇三)開府の江戸幕府に手塚吉兵衛は仕官出来たものと思われる。吉兵衛の年令を推測してみると、信蕃死

②江戸幕府の常備軍である。弓組十組、鉄砲組二十組。各組、組頭一騎、与力十騎、同心は三十名から五十名。時代によって変動があった。寛文五年(一六六五)火付盗賊改が新設された。弓組、鉄砲組の中の一組が任じられた。

## ③職務内容

江戸城の警備、將軍外出時の警護、江戸城下の治安維持等であった。

## ④吉兵衛の晩年

吉兵衛は晩年信濃国(長野県上田市手塚)に帰り、寛永十三年(一六三八)に死去、妻(菊さんか)は十年後の慶安元年(一六四八)に死去している。

(3)吉兵衛の三男盛行より手塚治虫家の医業は始まった。盛行は寛永中(一六二四〜一六三八)に水戸威公(御三家、水戸藩初代藩主徳川頼房、徳川家康の十一男)に仕えた。

藩(福島県長沼町)と府中領(茨城県石岡市)の二領から成立していた。お互いがとび地になっている。元禄十三年(一七〇〇)水戸藩徳川光圀死去に際して、五代將軍徳川綱吉の直々のお声がかかりによって成った藩である。その為二万石ではあるが格式が高かった。

①盛行は水戸威公の御殿医になぜなれたか  
中国の古典、四書五経の一つ「礼記」に「医は三世を経ずば、その薬を服さず」とあり、江戸時代にも「三代続いた医者を選んで、薬を調合してもらえ」とはよくいわれた言葉だそうである。(医学史の第一人者、深瀬泰旦著平成十二年(二〇〇〇)歴史と旅二月号)。

「定府制」によって参勤交代が免除にされてもいた。「水戸藩の御連枝」は次の四藩である。  
高松藩二十万石  
寛永十九年(一六四二)  
守山藩二万石  
元禄十三年(一七〇〇)  
長沼藩二万石  
元禄十三年(一七〇〇)  
穴戸藩一万石  
天和二年(一六八二)

従って盛行が余程優秀な医者であったと考えるしかないだろう。

(4)盛行の子盛方も医者となり、松平播州候(老中、播州国赤石藩主、松平信之)の待医となった。

(5)盛方、東益、良意、良仙光行、良仙光照、良仙光亨と手塚治虫家の医業は続いてゆくことになる。

(6)光仙光照(一八〇一〜一八六二)医者  
光照は、上田藩のとび地の川中島領(一万石)(現在の長野県千曲市)

良仙光行は、常陸府中藩(現石岡市)二万石松平播磨守の待医となっている。府中藩は、長沼藩府中と称する方が妥当である。(興国山清涼寺史)。長沼

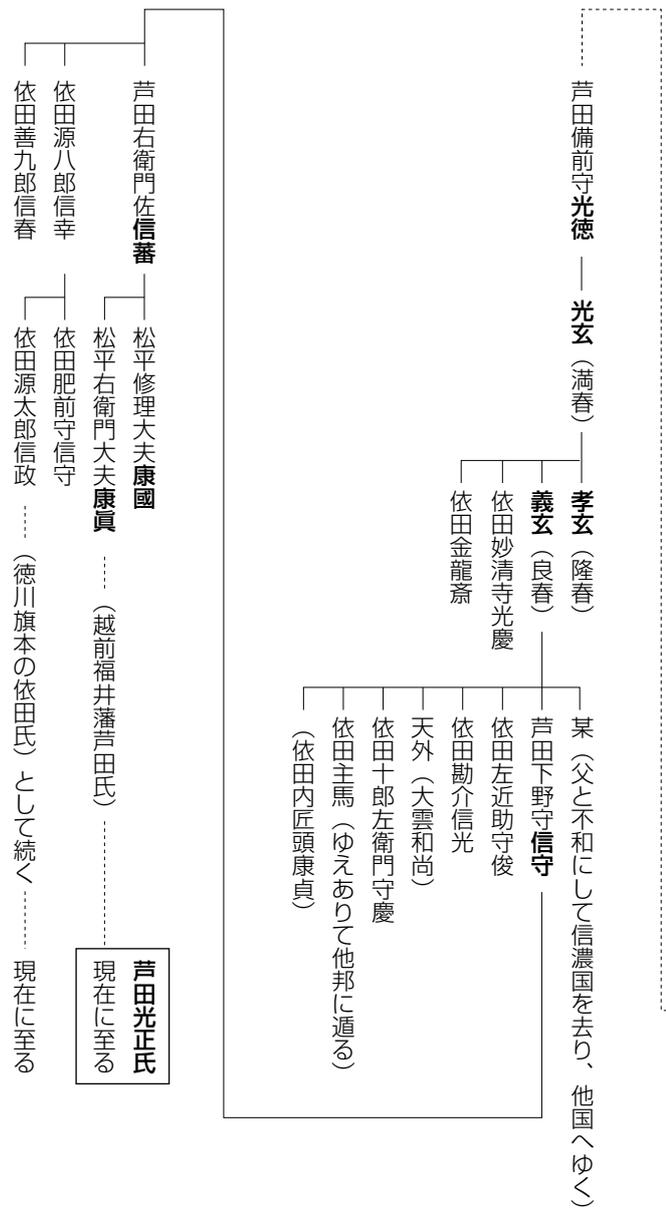
出身の内村総兵政弘の息子政富を三年間、長崎に医学の勉強に出している。政富は医者となり良斎を名乗っている。光照の娘秀と結婚し、手塚治虫家の隣に墓がある。又光照の娘梅香と

当である。(興国山清涼寺史)。長沼

家

清和天皇……経基王——(多田満快)……依田為真(為実)……飯沼行俊……依田唯心……芦田経光

## 依田氏系図



—— は直接の継続の代を示す。----- は間に何代かあることを示す。  
「戦国三代の記」市村到著 芦田光正氏の5文字上原榮治が追加

結婚した大槻俊斎も四年間長崎で医学修業しているが、金銭的援助をしたのは光照である。大槻俊斎は天保十二年(一八四一)に高島秋帆から送った痘苗を、葉種商神崎屋源蔵の姉の子に接種し、成功した。これが江戸での種痘の初めであると言われる。(吉村昭著、長英逃亡(上)より)。

この時代、江戸の薬種問屋、洋薬商は、最新の医者志す若者に、金銭の支援を行っていた。

(7)大槻俊斎(一八〇六〜一八六二) 医者、蘭方医

手塚良仙光照の娘婿で手塚接種法への貢献があった。お玉ヶ池八十三人衆(手塚治虫一族より六人参加)の中心人物として種痘頭取となっている。安政五年(一八五八)五月七日、お玉ヶ池種痘所設立。

その後、火事で焼けてしまい、大槻俊斎の自宅が西洋医学所になり、その後医学所となって、東京大学医学部となった。

東京大学医学部は設立日を安政五年(一八五八)五月七日と定めている。

(8)良仙光亨は、手塚治虫作品の「陽だまりの樹」のモデルとなった人。

(9)その子太郎は、現在の東大法学部首席卒業の法曹家。

(10)太郎の子息が繁。その子息が手塚治虫である。繁は法律を学んだ方であるが、丹平写真倶楽部のメンバーであり、芸術に才能があったようである。手塚治虫氏のご子息眞氏は多方面に活躍されている。平成十一年(一九九九)坂口安吾の「白痴」を映画化し、ヴェネツィア国際映画祭デジタルアワードを受賞している。その際一割の仕事は信州上田で行ったとのことである。奥さ

んは「ファンシィダンス」、「陰陽師」を描いた岡野玲子さんである。

(11)手塚家では二度ルーツが不明になった。

一度目は、手塚吉兵衛より数えて七代目の良仙光照の間(約二百年)である。ルーツは信州上田であることしか伝わっておらず、それ以上は不明となっていたようである。そこで良仙光照は、信濃国川中島(長野県千曲市)出身の娘婿、手塚良斎をして御先祖を調べさせ、手塚良斎は、信州上田別所温泉にある安楽寺にて吉兵衛夫妻の位牌を突き止めるに至った。更に良仙光照の孫、大槻玄俊(徳裕)は、安政四年(一八五七)安楽寺を訪れて、新たに厨子を作り、月牌料を副えている。

二度目は、手塚治虫までの間(約一五〇年)である。手塚治虫は、昭和二十九年(一九五四)に「弁慶」、昭和五十三年(一九七八)四月号「昭和五十五年(一九八〇)七月号の「火の鳥・乱世編下」に手塚太郎金刺光盛を登場させ、更に昭和五十八年(一九八三)七月二十四日、長野県白馬村にて開催された漫画フェスティバル会場で、自身のルーツは信州上田である事を宮下歯科院長宮下貞夫先生(長野県上田市在住)アトム协会会长)にお話しされたとの事である。そ



火の鳥 乱世編 1978年(昭和53年)4月号  
 ~1980年(昭和55年)7月号



弁慶(原題: はりきり弁慶) 1954年(昭和29年)

©手塚プロダクション

の後、竹下悦男十二代長野県上田市市長(在職平成六年(一九九四)〜平成十年(一九九八))が長野県上田市諏訪形の須川地区に手塚ワールド誘致に動いたが実現せず残念な結果となってしまった。その時は上田市の幹部級職員二名を東京都新宿区に在る(株)手塚プロダクションに派遣したとのことである。

かつたら、手塚治虫家のルーツが信州上田であることは永遠の闇に消えてしまったと思われる。若林恭英ご住職には感謝のしようがありません。又、手塚治虫家ルーツ証明に加われたことは幸運なことでした。手塚治虫氏顕彰にこれからも邁進したいと考えています。(2)岡野玲子さんについて

平成一十七年(二〇一五)私(上原

漫画家。「ファンシイダンス」、

榮治一アトム(の会代表)は、母親一族の先祖供養に「手塚太郎金刺光盛―手塚一族の後裔はどこへ?」を出版。拙著を手塚治虫氏ご子息眞氏に謹呈した

同時期にNHKファミリーヒストリーに手塚治虫氏取り上げのお話があった

そうである。番組の調査中、信州別所温泉安楽寺に手塚治虫家ご先祖の位牌があるとの情報をいち早く掴んだ

金子藩医であつた鮭延秀庵義知の両養子となつています。秀庵義知の先祖は、

NHKディレクター矢野哲治氏は、若林恭英安楽寺ご住職に照会したが最初

最上義光(五十七万国、伊達政宗の伯父)に仕えた戦国武将鮭延秀綱の弟鮭延綱知で、兄秀綱の娘と結婚したのが、

は「手塚」姓の檀家は無いとのことのお答え

鮭延氏の筆頭家老岡野九朗左衛門なのです。その家系が岡野玲子さんです。

だつたとのこと。矢野ディレクターが

そして、鮭延氏の居城、鮭延城は最上川(山形県)の支流鮭川を見おろす高

「いや手塚治虫家の家譜に安楽寺にあると記されている」と指摘したところ、

台に位置します。山形県最上郡真室川町にあつた山城です。又鮭延姓を名乗

若林恭英ご住職が先代より聞いていた

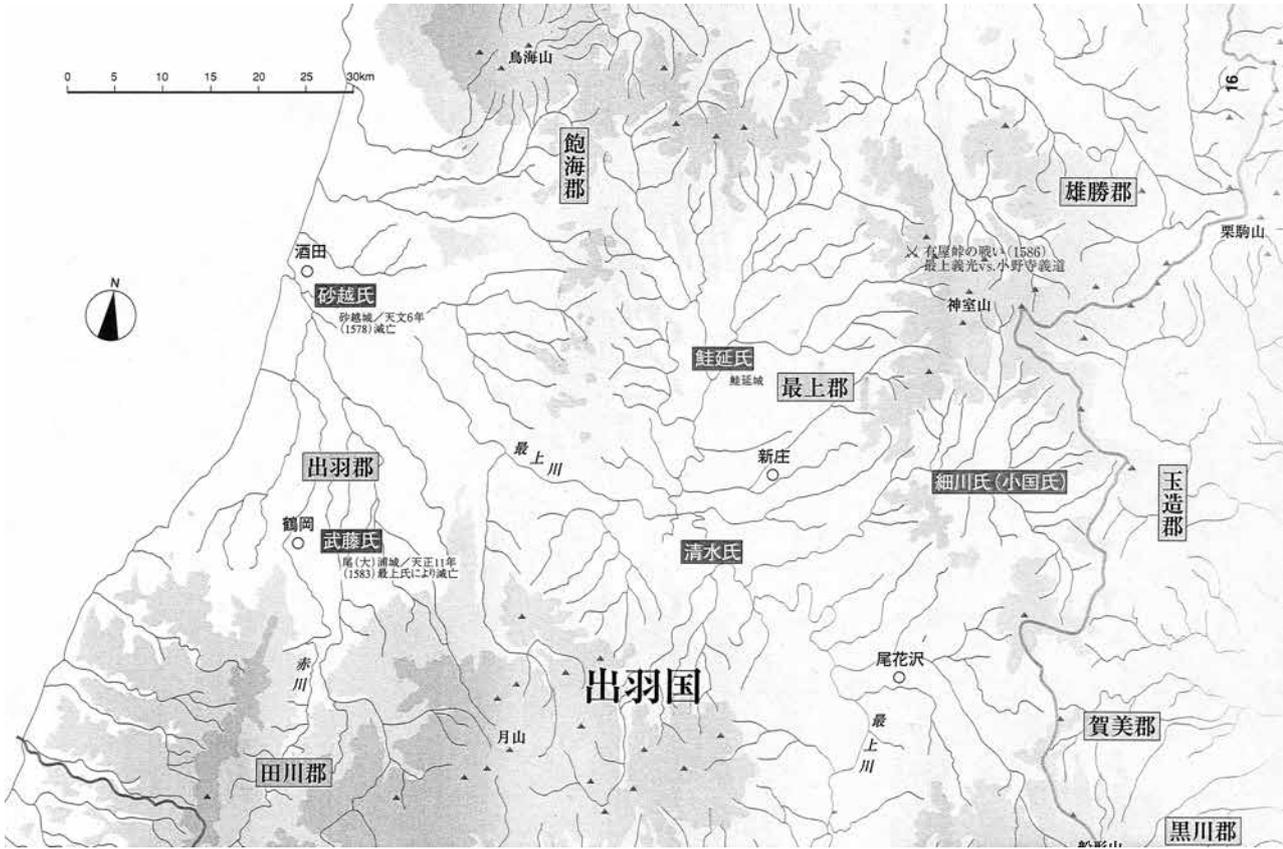
る家は現在十軒程だそうです。

「長沼待医の厨子」の存在を思い出し、

厨子の中から「手塚吉兵衛ご夫妻の位牌発見」に至つたものである。もしも

若林恭英ご住職が気づいてくださらな

岡野玲子さんは戦国武将の家系だった!!

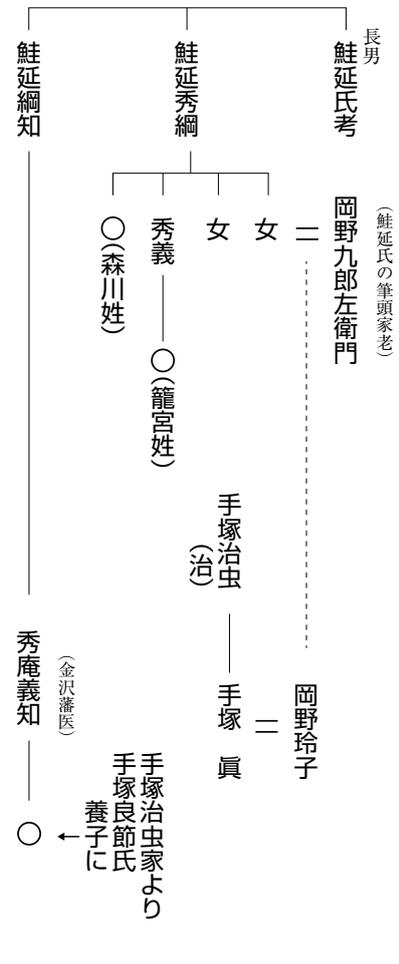


決定版 図説・戦国地図帳 (学研)

## 鮭延氏のしるし

近江源氏佐々木氏。戦国時代には、最上義光もがみよしあき (五十七万石大名・伊達政宗の伯父) に仕えた武将であり、山形県真室川城主である。鮭延秀綱は、江戸時代初期の最上家御家騒動に巻き込まれ、改易、御家取り潰しとなる。その後徳川家康の実子と言われる、土井利勝 (大炊殿) 預かりとなる。

山形から茨城古河に移り、岡野九郎左衛門以下二十名の家臣に五千石を与えて余生を送った。手塚治虫氏は昭和四十七年 (一九七二) に最上殿始末を描いている。



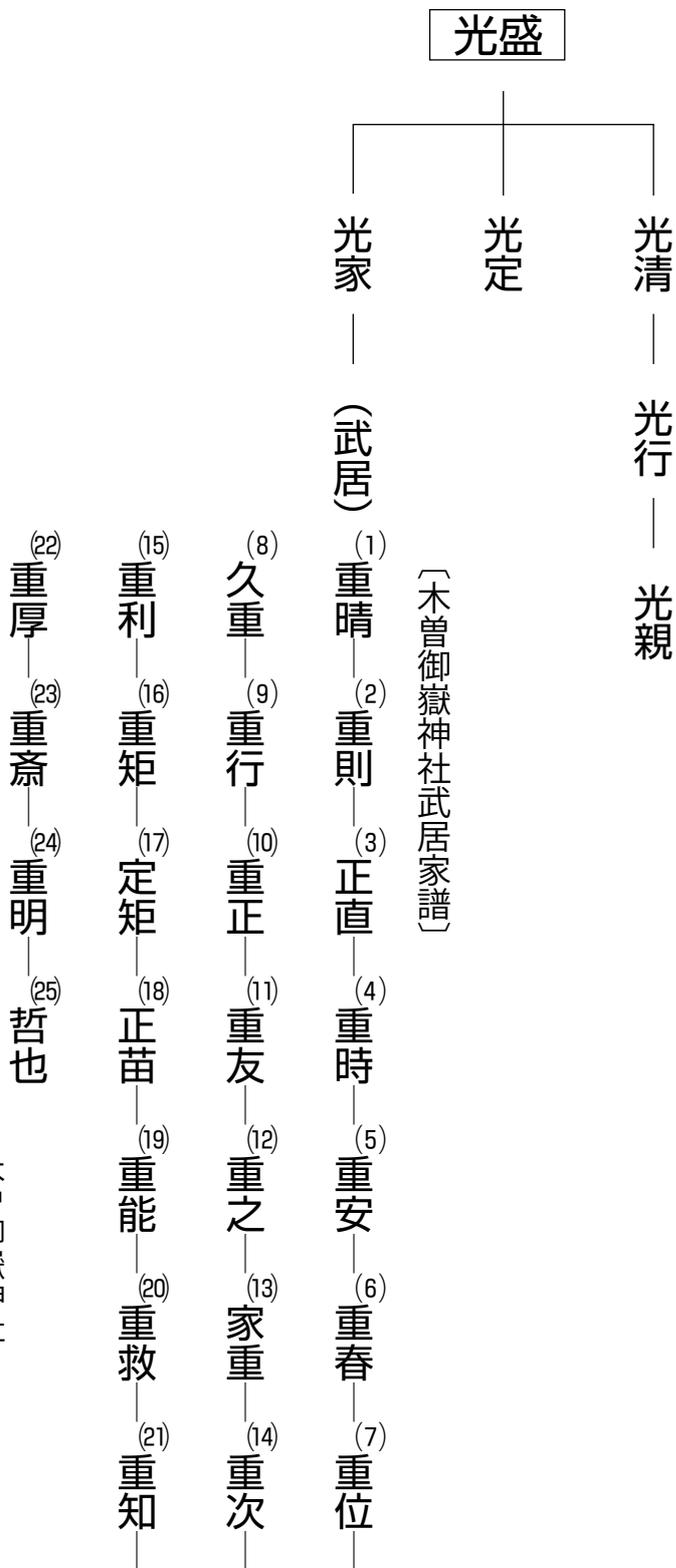
※岡野玲子・早川和見両氏より多大のお教えを頂いた。

# 木曾御嶽神社に手塚太郎金刺光盛の子孫が！

平成三十一年（二〇一九）三月下旬、「手塚太郎の会」会長市村徹さんから「上原さん、大変なことになりましたよ」と電話をいただいたのが驚きの始まりでした。市村徹会長によると、上田市役所市民参加、協働推進課から電話をもらったと。それは木曾総社木曾御嶽神社神職、武居哲也氏からで「自分分は手塚太郎金刺光盛の子孫と教えられてきたけれど、詳しく光盛について教えて欲しい」との内容でした。私の拙著と光盛関係の資料を武居哲也氏に送って、二、三日後第二弾の驚きが届きました。中学、高校、大学と同期の羽田（旧姓細川）富雄君（長野県上田市諏訪形在住）と仕事で一緒にあり、雑談の中で木曾御嶽神社の話をしたところ「うちから木曾御嶽神社武居家に嫁いでいる女性がいる」と言うのでびっくり。早速四月初め、お父さんの羽田誠之氏を自宅にお訪ねし、ロンドンインタビューをさせて頂きました。七月中旬には羽田富雄君と二人で木曾の武居哲也氏にお目にかかり、武居家家譜も頂戴し、人の縁の不思議さに驚かされました。ところがそれだけでは終わらず、第三弾の驚きが一週間後にやってきたのです。ある会合に出席したところ手塚太郎金刺光盛の子孫で、日頃自宅にもお伺いし、光盛関係の本、資料を頂いている方に偶然お会いすることになりました。

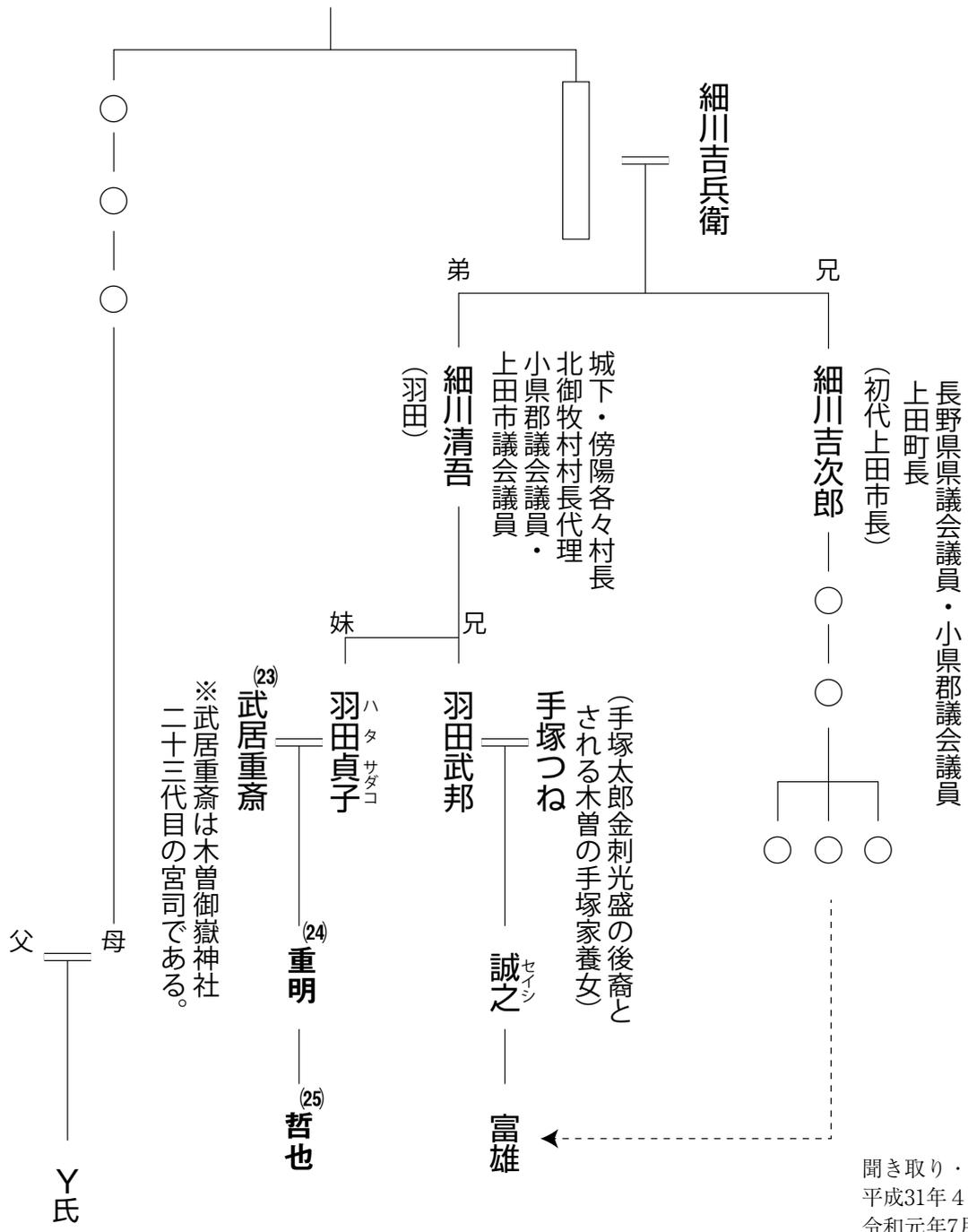
武居哲也氏と羽田富雄君の件を話していたところ、隣にいたY氏が「母親の実家から細川家に嫁いで、その子息は初代上田市長になった」と話される

## 手塚太郎金刺光盛系図



※二十四代重明 羽田家で出生  
 ※光家と重晴の間に二名位いらした可能性があるのではないかと、武居哲也氏にはお話ししてあります。

木曾御嶽神社  
 神職 武居哲也氏提供



聞き取り・作成 上原榮治  
平成31年4月6日  
令和元年7月29日  
令和元年8月1日  
(敬称略)

のでまたびつくり。その場から羽田富雄君に電話し、三日後お父さんの羽田誠之氏にお目にかかり実家を確認したのでした。Y氏は高校、大学共同窓という不思議さ。こういう事があるんだと只々驚くばかりです。まるで光盛公のご意志が働いているかのようです。

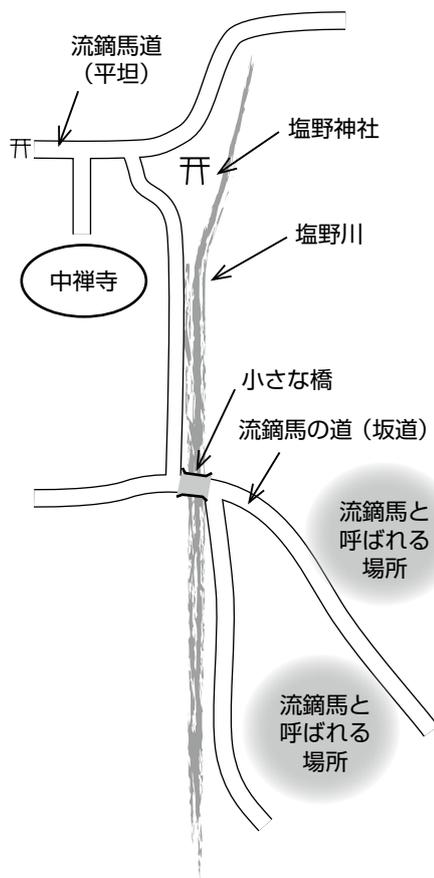
+++++

令和二年六月二十四日、羽田誠之氏が九十歳でご逝去されました。長時間の聞き取りにもかかわらず貴重なお話をさせて頂きました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

# 流鏑馬の語源について

## 塩田平・塩野神社近くの 小字流鏑馬について

塩野神社近くにお住まいの方に流鏑馬の道と呼ばれる道と地域を現地でご案内いただきました。塩野神社前南方約五〇〇メートル位のところにそれがあります。流鏑馬の道と流鏑馬と呼ばれる地域は、法務局で調べると小字惣門となっており、小字流鏑馬は確認できませんでした。なだらかな坂道と矢の練習が出来そうな場所がありました。馬を走らせての騎射は難しそうです。想像が膨らみます。



ヤブサメは、馬上からの向けて矢を射て、その優劣を競った騎射の一式である。多くの人がその映像を見ておられると思うので、ヤブサメと言えば、容易にイメージは出来るものと考ええる。初見は『中右記』嘉保三年（一〇九六）四月二九日条鳥羽殿でのそれとされている。（歴史大辞典）『古語辞典』の定義は次の通りである。「ヤブサメとは、騎射の一式。方形の板を申にはさんで三ヶ所に立てて的とし、馬を走らせながら次々に鏑矢で射るもの。……もと騎射の練習に始まったが、後には儀式化して、多く神事・祭事の際に行われた。」

ものは無かったと思われる。ただ一つ言及しているのは東京外語大学教授であった小沢重男氏（一九二五～二〇一七）のモンゴル語説である。モンゴル文語の *yabusamai*（走っている家畜・進んでいる家畜）に対比される語句であろうとしている。そして動詞語根の *yabu* と形動語（連体形）の語尾 *-samai* に分けられる *-samai* は *ccvc*（*c* は子音・*v* は母音）の最初と最後の *c*（子音）は脱落して *ccvvcv* は *ssas* でヤブサとなる。更に *x* 類の *pac*（*a* 子音）に由来するものがあつたとし、*accv* の変化を起して *mal>mx* と転化したとしている。但し音声面が可能であるが、意味面「矢を射る」の意味が出てこない指摘し

ている。しかしモンゴルにも馬上からの射る競技が存在し、「馬上から矢を射る」という特別の動詞 *namata* に言及している。

参考・現代日本語の母音はアイウエオの五つ。奈良朝には少なくとも六つ、学者によっては八つの母音があつたとしている。「上代仮名遣」のことである。甲類、乙類の別があつた。

参考文献・日本語の故郷を探る 小沢重男著 講談社現代新書

本編は言語学の領域に踏み込んでいくので慣れてないと少し取っ付きにくいかと思えます。四十数年前、大学生の頃小沢重男氏が著された「日本語とモンゴル語」の名著を手に入れて何度も読み返したものです。当時一万円近くの売価の本でしたが、何度か引越越しを繰り返すうち紛失してしまいました。先日、小沢重男氏の新書を古本屋で見つけ、ページを聞くとヤブサメの語源に言及した章が目飛び込んできました。不思議な体験でした。

## 手塚治虫氏略歴

本名 手塚治

一九二八年生まれ

医学博士号を持つ医師で「漫画の神様」と称される。ストーリー漫画によって多大な功績をもたらした。偉大なアニメーターでもある。

## 手塚眞氏略歴

一九六一年生まれ

手塚治虫（手塚治）氏長男

ヴァイジューアリスト

映画監督、作家に才能を発揮。

『白痴』にて一九九九年（平成十一年）ヴェネツィア国際映画祭デジタルアワード受賞

一九九九年（平成十一年）カメラマジユ国際映画祭シルバーフロッグ賞受賞  
二〇〇〇年（平成十二年）レイクアローヘッド国際映画祭ベストフィーターフィルム賞受賞

## 岡野玲子氏略歴

茨城県古河市出身

漫画家

一九八九年 手塚眞氏と結婚

「ファンシイダンス」で第三十四回小学館漫画賞受賞。周防正行監督映画化。

二〇〇一年「陰陽師」（原作夢枕獏）で第五回手塚治虫文化賞マンガ大賞受賞。

二〇〇六年「陰陽師」（原作夢枕獏）で第三十七回星雲賞 コミック部門受賞。

## 参考文献

- |         |                         |             |
|---------|-------------------------|-------------|
| 青木大輔著   | 大槻俊斎                    | 大空社         |
| 水原明人著   | 大江戸「伝馬町」ヒストリー           | 三王館刊        |
| 稲垣史生編   | 武家編年事典                  | 青蛙房刊        |
| 神坂次郎著   | おかしな大名たち                | 中央公論社       |
| 海音寺潮五郎著 | かぶき大名                   | 文春文庫        |
| 小林計一郎著  | 真田一族                    | 新人物往來社      |
| 梶原正昭    |                         |             |
| 山下宏明    | 校注 平家物語（三）              | 岩波書店        |
| 吉村昭著    | 長英 逃亡（上）（中）（下）          | 毎日新聞社       |
| 早川和見著   | 山形最上家と古河土井家について その関係諸考察 |             |
| 手塚治虫著   | 弁慶 手塚治虫漫画全集             | 講談社         |
| 手塚治虫著   | 火の鳥十二巻 乱世編 手塚治虫漫画全集     | 講談社         |
| 上原榮治著   | 手塚太郎金刺光盛―手塚一族の後裔はどこへ―   | （有）グリーン美術出版 |

尚本小冊子の文責は全て私（上原榮治）にあります。引用箇所には、お名前、参考文献名を記載し、写真等使用につきましては、各個人の方々、法人等に許諾を頂きました。漏れがありましたら浅学に免じて、どうかご容赦頂きますよう宜しくお願い致します。



## 田浦紀子氏「『アドルフに告ぐ』とその時代」寄稿によせて

アトムの会は「令和三年度のわがまち魅力アップ応援事業」の中で他団体との連携を深めつつ、地域の歴史、文化、自然について掘り起こすと共に、「漫画の神様」手塚治虫氏の顕彰活動を行なって参りました。

本年度はアトムの会の県外会員で大阪在住の田浦紀子さんに寄稿して頂きました。熱心な手塚ファンで二〇一七年に和泉書院より『親友が語る手塚治虫の少年時代』を上梓されました。上田にも夫君の田浦誠治さんと複数回訪ねており塩田平を私もご案内しました。今回、田浦紀子さんは本寄稿文で『アドルフに告ぐ』を取り上げ、作品を通して手塚治虫氏の人生を紐解かれています。『アドルフに告ぐ』は、手塚治虫氏が少年時代を過ごした兵庫や大阪などを舞台にした長編大河ドラマであり、氏自身が体験した戦争の時代背景がリアルに描かれています。田浦さんは、手塚治虫氏と共に少年時代を過ごしたご弟妹や同級生、そして『アドルフに告ぐ』の制作に携わったアシスタントの方々に綿密に取材され、本稿を執筆されました。戦前戦中戦後を力強く生き抜き、漫画を通して戦争の語り部たらしんとする手塚治虫氏の総決算の作品が『アドルフに告ぐ』であったと位置づけられています。ぜひ本冊子を通して手塚漫画の奥深さを知っていただければ幸いです。

令和四年初春

アトムの会代表 上原 榮治



# 「アドルフに告ぐ」と その時代



作画：伴 俊男

田浦 紀子

## 目次

手塚治虫の少年時代……………	25
手塚治虫の父・手塚繁……………	31
手塚治虫と戦争……………	35
『アドルフに告ぐ』とその時代……………	39

# 「アドルフに告ぐ」とその時代

田浦 紀子



『アドルフに告ぐ』  
講談社  
手塚治虫文庫全集3巻

手塚治虫の後期の代表作『アドルフに告ぐ』（1983～1985年『週刊文春』連載）は、戦時中のドイツと日本の神戸を舞台にした二人のアドルフが主人公の物語である。ドイツの高官と日本人の母の間に生まれたアドルフ・カウフマン。ユダヤ人のアドルフ・カミル。カウフマンの自邸は神戸北野異人館にあり、カミルは神戸元町のパン屋という設定である。また、二人の主人公の年齢は、1928年生まれの手塚治虫と同年齢に設定されており、まさに手塚治虫の少年時代の時代背景をもとに描かれた作品なのである。作者自身「この作品は私の日記のようなもの」と語っている。

物語は昭和11（1936）年にドイツで開催されたベルリン・オリンピックから始まり、終戦を迎えた昭和20（1945）年、昭和23（1948）年、そして時代は飛んで昭和48（1973）年へと展開、物語が閉じるのが昭和58（1983）年である。

狂言回しである峠草平と二人のアドルフの物語は、戦時中の歴史事件とシンクロする形で進み、昭和20年の終戦をもって一旦締めくくられる。もともと作者の構想では1948年のイスラエル共和国建国から1970年代の中東戦争まで綿密に描く予定であったが、連載中に手塚

が入院し、3か月の休載を余儀なくされたため終盤は駆け足で物語をまとめる形となった。

1973年は手塚治虫の会社である虫プロ商事と虫プロダクションという二つの会社が倒産した年であり、その一方で不死鳥のごとく手塚を漫画家として蘇らせるきっかけとなった『ブラック・ジャック』の連載が始まった年である。1983年は『アドルフに告ぐ』の連載が始まった年であり、物語では峠草平が「アドルフに告ぐ」と題した小説をカミルの妻・エリザの元へ持って行き、アドルフ・カミルの墓に花を手向けると「最後のアドルフが死んだ今この物語を子孫たちに贈る」という言葉で物語は幕を閉じる年である。

この手塚治虫の長編大河ドラマの背景となった時代を手塚治虫の人生を軸にどのようなものだったのかを紐解いていきたい。

## 手塚治虫の少年時代

手塚治虫は、昭和3（1928）年11月3日大阪府豊中市に生まれた。手塚粲（ゆたか）、文子（ふみこ）の長男として生まれ、治（おさむ）

と命名される。出生の地は「大阪府豊能郡豊中町大字南轟木八拾九番地」とされており、この場所は、現在の阪急電鉄豊中駅の東側、豊中市本町一丁目にあたる。また、手塚家の弟、治虫の叔父である手塚昇の住まいが豊中駅の西側の相生通一丁目（現在の豊中市玉井町二丁目）にあった。手塚家は治虫が二歳頃、豊中駅より少し南の阪急電鉄岡町駅と曾根駅の間位置する豊中市南桜塚一丁目に転居しているようで、近くには後に手塚の妻となった岡田悦子の実家があった。悦子の母・岡田速女は、治虫の弟の手塚浩が昭和5年に生まれた際には産湯を使う手伝いをしたという。

豊中時代のことについて、手塚浩さんは次のように語っている。

「阪急電鉄豊中駅からさほど遠くない位置（当時の大阪府豊能郡豊中町）に、治虫の生家（のちに本籍地は宝塚に移籍）がありました。私（浩）も豊中で生まれたのですが、思い出す風景は、竈が置いてあった比較的大い土間と阪急電鉄岡町駅の下り線側にあった引き込み線と道路との境界に設置された黒く焼いた枕木で造られた柵（宝塚線に大形車輛が運行されるために車輛限界が拡張され、駅が改装される1950年頃までは存在していた）くらいです。それから、治虫の妻になった岡田悦子さんの家族が住んでおられた屋敷は、手塚家とは別の区画にあり、お互いに近くに位置していたとのこと。

近くには、今でもその名が知られる「東光院萩の寺」があり、この寺で読経の際に鳴らされる木魚のポクポク音がよく聞こえたそうです。治虫にはその音が妖怪じみて聞こえて、あまり好きではなかった一方で、怪談的な物語やロマンの資料にもなったことは想像に難くありません。」



「吉田地図豊中市南（昭和41年）」に手塚家、岡田家の場所を補記。昭和初期の頃、手塚家と岡田家は同じ豊中市南桜塚にあり、親交があった。

『アドルフに告ぐ』と同時期に連載され、手塚治虫が自身のルーツを描いた作品が『陽だまりの樹』（1981年～1986年）である。曾祖父・手塚良庵を主人公に幕末の動乱期を描いた本作では、良庵が大阪・適塾の緒方洪庵に学び、江戸で蘭方医として生き、最後は西南戦争に従軍して死去するまでの生涯が描かれている。

『陽だまりの樹』の終盤で、長男・太郎が良庵に「法律を学びたい」と言うシーンがある。手塚治虫の祖父・手塚太郎は、司法省法学校（現在の東京大学法学部）でフランスの法律を学んだ。卒業後、検事として赴任していた大阪始審裁判所在任時代の明治19（1886）年には、関

西法律学校（後の関西大学）の創設にも携わる。その後、名古屋、仙台、長崎などに赴任する。手塚太郎は大正13（1924）年2月に宝塚に土地を取得して和洋折衷の邸宅を構える。阪急電鉄宝塚本線の開業が明治43（1910）年であり、翌年には宝塚新温泉（後の宝塚ファミリールンド）が開業し、大正13年に宝塚大劇場が竣工していることを鑑みても、小林一三による阪急沿線の開発とともに発展する阪神間での生活を見越したものと思われる。

手塚太郎は裁判官として十二年勤めた長崎控訴院を定年退職した大正14年、隠居先として兵庫県川辺郡小浜村川面字鍋野二九番地の二（現在の宝塚市御殿山二丁目）に移り住んだ。門の表札には「手塚寓」（寓居の意）と書かれていた。

昭和7（1932）年11月に手塚太郎が死去した後は、長男の手塚繁が宝塚の屋敷を相続し、一家は豊中から宝塚に移り住んだ。以後、手塚治虫は漫画家として活躍の舞台を東京に移す昭和27（1952）年まで、約二十年間を宝塚で暮らすこととなる。

宝塚駅の北側、ゆるやかな坂をのぼった閑静な住宅街の中に、手塚治虫が暮らした家がある。建物は替わっているもの、手塚家が住んでいた当時からあった樹齢百年以上になるクスノキの大樹は健在である。このクスノキを、手塚治虫は怪談『新・聊齋志異 女郎蜘蛛』（1971年）の冒頭で描いている。枯れかかった老樹を職人が伐採しようとする、突如老人が現れ「まだ生きています…切り倒さないでください…後生です…」と懇願して去って行く。

また、周辺には瓢箪池（下の池）、蛇神社、猫神社（千吉稲荷）などが現存し、手塚が少年時代、昆虫採集に夢中になった当時の面影がしのばれる。



宝塚の旧手塚邸。現存するクスノキは『新・聊齋志異 女郎蜘蛛』に登場する。

手塚家近辺はタカラジェンヌの住まいが多く、「歌劇長屋」と呼ばれていた。後に母・文子の影響で歌劇に傾倒したことと相まって手塚の少女漫画には宝塚歌劇の影響が色濃く表れている。『アドルフに告ぐ』の作中登場する芸者絹子こと本多サチは「芸妓になる前に宝塚歌劇学校を受験した」設定になっていて、冒頭の絹子殺害現場のシーンでは「兵庫川辺郡小浜村の俗に御殿山と呼ばれている山林の中で」と記すなど、故郷宝塚に対する思い入れは深い。エッセイ「私の宝塚」には次のように書かれている。

「ぼくは宝塚歌劇が少女歌劇といった時代、もっとも変化に富んだ時代の何十年間を身近に過ごし、その影響を受けて育った世代である。なにしろ、うちの隣家は天津乙女と雲野かよ子姉妹の住まいであり、彼女らに抱かれてぼくは育ったのである。うちの並びのはずれには、広島で

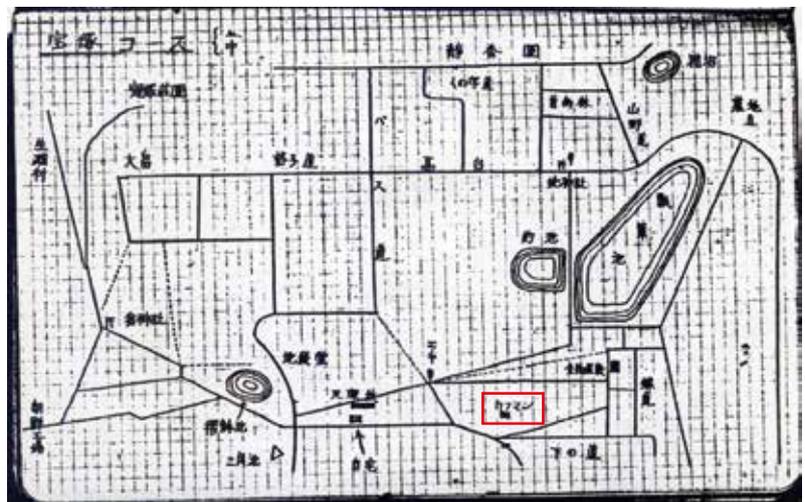
被爆死した園井恵子が住み、また、歩いていける隣の町内には越路吹雪がいた。宝塚音楽学校の入学期ともなれば、愛くるしく美しい新入生たちが、ぞろぞろとうちの玄関先を通って、天津乙女の家へあいさつに通うのだった。ぼくの母は宝塚の熱狂的なファンで、そういった新入りの生徒たちが緑のはかま姿でよくうちへ遊びにきた。彼女らのコーラスを聴いて、ぼくは宝塚の歌をおぼえ、ぎこちなくピアノで弾いたりしたものだ。」

（初出「朝日新聞大阪版」1984年3月20日、講談社手塚治虫漫画全集『手塚治虫エッセイ集6』1997年等所収）

自宅の応接間の格納棚には、父・粲の趣味であるクラシックや軽音楽のレコードと併せて、当時の宝塚スターであった小夜福子、芦原邦子、草笛美子、三浦時子、橘薫、藤花ひさみ等のレコードが取り揃えられていた。母・文子は宝塚大劇場に足しげく通い、自宅では自らピアノを弾き、三人の子ども達にバイエルをはじめとした練習曲を熱心に教えた。治虫の四歳年下の妹・美奈子は、後に国立音楽学校に進学し、ピアニストとなる。

また、手塚家の近くには「カウフマン」という名前のドイツ人が住んでいて、これが『アドルフに告ぐ』の主人公の名前のモデルとなった。手塚治虫は文藝春秋ハードカバー版のあとがきでこのように語っている。

「その以前から、ヒットラー総統が実はユダヤ人の血をひいている説があるという記事をどこかで読んだことがあり、そのアイデアをこの構想に加えることにしました。ちょうどぼくのかつて住んでいた宝塚家の近くにカウフマン氏というドイツ人の家庭があり（別に情報部員でもなんでもありません）、名前を覚えていたのでなんの気なくその名を主人公に拝借したのです。」



手塚治虫の昆虫手帳。自宅より東（右）側に「カフマン」の記述がある。

カウフマン邸について、手塚浩さんは当時の思い出を語っている。

「旧手塚邸から距離で100メートルあまり東寄りの、山手にさしかかる右側傾斜面に瀟洒な西洋館（三角屋根の二階建）がありました。色白のお姫様のようなお嬢さんが住んでおられ、ご両親と連れ立って手塚家の前を屋敷の方へ向かって歩いているのを、偶然庭にいた私が、生け垣越しに見てしまいました。そのころはちよっと山を歩けばそこにここに自生していたモミジイチゴ（いわゆるキイチゴ）のことを皆さんでお話していたようで、「あれおいしいねえ」と大阪弁のアクセントで一言

言われた姫君が急に身近に感じられたのです。」

昭和10（1935）年4月、手塚治虫は池田師範附属小学校に入学する。阪急電車での通学で一緒になった友人が、同級生の大森俊祐であった。テレビ番組「ふるさと人間記 ぼくの宝塚―手塚治虫―」（サンテレビ・1981年1月放送）には、大森俊祐と手塚治虫が、手塚邸のクスノキの前で語り合う映像が記録されている。

大森は、手塚家の本棚には漫画本が約百冊あり、自分が初めて借りた本はナカムラ・マンガライブラリーの『天晴れカツちゃん』であったこと、手塚君は親に漫画の本を買ってもらい、自分が読み終わるとすぐに学校へ持って来て、皆に見せてくれたことを話した。島田啓三の『冒険ダン吉』や、中島菊夫の『日の丸旗之助』、牧野大誓・井元水明の『長靴の三銃士』等の漫画との出会いは、すべて手塚君からの恩恵であった、手塚君の家



手塚浩さん。高台から宝塚の街を一望できる場所です。（2018年3月）



「親友が語る手塚治虫の少年時代」

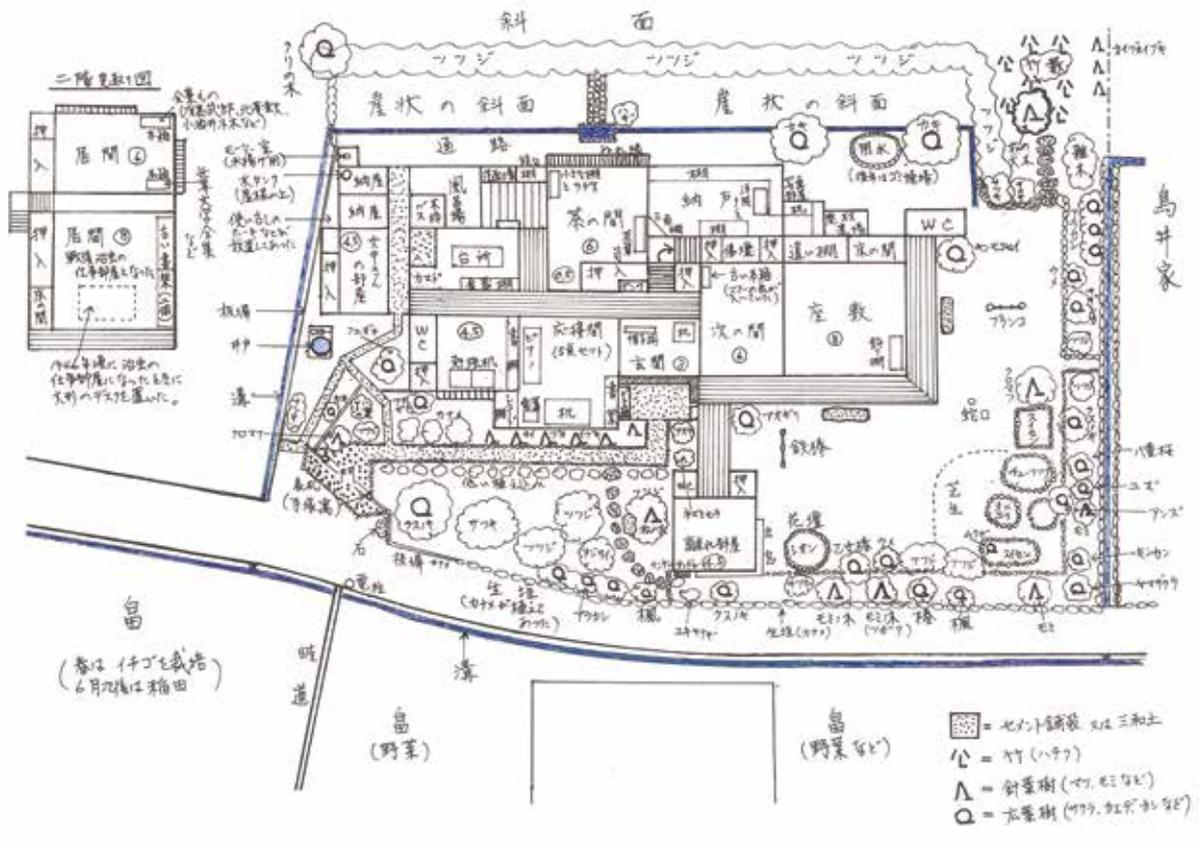
（2003年4月5日豊中で開催）

左から手塚浩、宇都美奈子、大森俊祐。

は大変文化的だったと思いい出を語った。終生の友人となった大森の頼みで、手塚は、豊中市立第三中学校で講演を行った。1988年10月31日、手塚が亡くなる三か月前のことであった。豊中市すこやかプラザ2階の銅板パネルにはその際に描かれたイラストが使われている。アトム、レオ、サファイア、火の鳥、ブラック・ジャック、写楽保介、ヒゲオヤジ、ユニコ、ヒョウタンツギ。手塚は既に癌を患っていたが、力強くキャラクターを描いた。



1988年10月31日、豊中市立第三中学校での講演会終了後、描かれたイラスト。



旧手塚邸の間取り図 (作画：手塚浩)



父・手塚粲が宝塚の自宅の庭で撮影した写真。後列右から手塚治虫、手塚美奈子、大森俊祐、前列右が手塚浩 (写真提供：大森俊祐)

## 手塚治虫の父・手塚粲

昭和20年8月に終戦を迎えたが、その年の暮れになっても父の手塚粲は帰郷しなかった。漸く父が復員したのは明けて昭和21年1月のことであつた。家に戻つて早々に「日本軍が如何に戦つたか、如何に強かつたか、いづれゆつくりと話してやるう」と言つた父は、その後どうとう戦地での体験談を話すことは無かつたという。

手塚治虫の父・手塚粲は明治33（1900）年11月、法律家・手塚太郎の四番目の子ども、長男として東京で誕生する。東京の中央大学法学部を卒業するが、父と同じ法曹界には進まず、大正13年、大阪市北浜四丁目に本社を置く住友倉庫に入社する。後に住友伸銅鋼管（昭和10年に住友金属工業）に異動となり、大阪市此花区の桜島工場で会計事務の仕事に従事する。

昭和2年に服部文子と結婚し、昭和3年11月に長男・治が誕生。二年後の昭和5年10月に次男・浩が誕生、さらに二年後の昭和7年9月に長女・美奈子が誕生した。

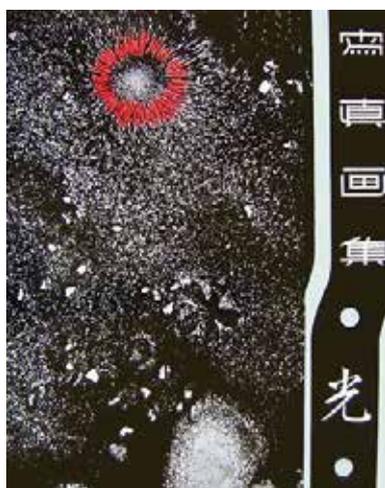
手塚家の食生活はつましく、子ども達に対して厳格な躾をする一方で、手塚粲が読書好きであつたため、書物は豊富にあつたという。自宅の廊下には当時一般家庭としては珍しかった電話機が設置され、応接間にはアメリカ製の電気蓄音機があり、レコードを多数所有し、音楽に触れる機会も多かつた。宝塚ホテルで行われたクリスマスパーティーに参加したり、毎年正月には大阪朝日会館で行われた漫画映画大会に子ども達を連れて見に行くなど、文化面での情操教育は十分であつた。こうした恵まれた家庭環境は、後の漫画家手塚治虫の才能を大いに開花させることとなる。

手塚粲は撮影が趣味で、ライカなどの写真機や、8ミリの撮影機、フランス製のパテ・ベビーという手回し式の映写機などを所有し、子ども達をよく撮影した。また、手塚粲は大阪市中央区心斎橋二丁目の丹平ハウスに拠点を構えていた「丹平写真倶楽部」に所属していた。丹平ハウスは一階に丹平製菓が運営する薬局と喫茶店、二階には写真スタジオに隣接して赤松麟作洋画研究所があり、前衛芸術家達の社交場となつてた。

昭和15（1940）年に出版された丹平写真倶楽部の十周年記念写真集『光』には、手塚粲による写真「PHANTOM」と「望郷」が収録されている。しかし、こうした自由で豊かな生活は戦争によって失われていくこととなる。



『大大阪画報』（1928年）より丹平ハウス外観



丹平写真倶楽部による十周年記念写真集『光』（1940年）。国書刊行会から2006年に復刻出版。

昭和14（1939）年9月、ナチスドイツがポーランドに侵攻したことにより、第二次世界大戦が始まった。昭和15（1940）年、ナチスドイツの手から逃れ、リトアニア・カウナスの領事代理の杉原千畝が発給した「命のビザ」を持って、福井県の敦賀港に上陸したユダヤ人難民は兵庫県神戸市に一時滞在し、そこから亡命先のアメリカを目指した。

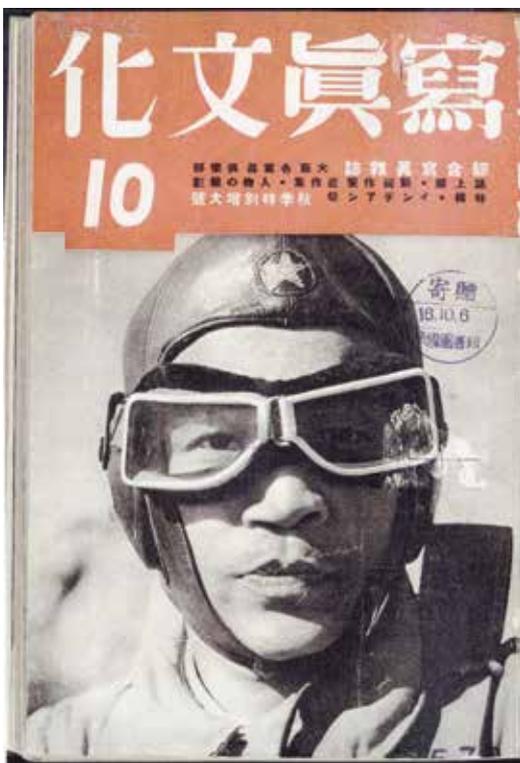
『アドルフに告ぐ』第20章では、アドルフ・カウフマンの助けにより、ユダヤ人の少女エリザ・ゲルトハイマーがドイツから日本に向けて単身亡命する様子が描かれている。カウフマンの親友で神戸元町に住むユダヤ人のアドルフ・カミルがエリザを神戸港に迎えに行くシーンには「昭和15年（1940）11月」とあり、时期的には杉原千畝がリトアニアでビザを発給していた1940年8月と合致する。

昭和16（1941）年3月16日、手塚繁は丹平写真倶楽部のメンバーの安井仲治らと神戸在留ユダヤ人の撮影会に参加した。当時、同行していた手塚浩さんはこのように語る。

「父に「外国人を撮影するのに神戸へ行くから連れて行ってやる」といわれた時は、憧れの神戸に行けるといっただけで最高の喜びでした。なぜ外国人を撮影するのか、なぜそのために神戸に行くのかなどの説明はなかったし、それは当時まだ十歳だった私にはどうでもよいことでした。神戸では車体が薄緑色の市電が走り、乗り物好きの浩は夢中で眺めました。この時なぜ兄治虫と一緒に行かなかったのは今となっては本当の理由はわかりません。たぶん北野中学への進学を控えて慌ただしかったからではないかと思われます。また、安井仲治氏のご子息の安井仲雄氏と私は同じ池田師範附属小学校の一年年下で、普段の通学も一緒。仲雄君と一緒に浩も楽しいだろう、という父の配慮があったのかもしれない。」

神戸での撮影予定場所では随分待たされ退屈で、私は仲雄君とタイサンボクの葉でグライダー遊びをしていました。北野の異人館のひとつで漸く撮影が始まり、黒っぽい衣服をまとった白人がガヤガヤする異様な雰囲気の中で、子ども心に軽い緊張感を覚える傍ら、かなり退屈だった記憶があります。その人達がユダヤ人であり、ナチスの厳しい圧迫を受けていた民族がなぜ日本に居留していたのか、当時の私は知る由もありません。記憶に残る風景は、暗い倉庫のような部屋の中にたくさんの荷物が置かれていたこと。それが国外へ移住するためのものであったのでしよう。」

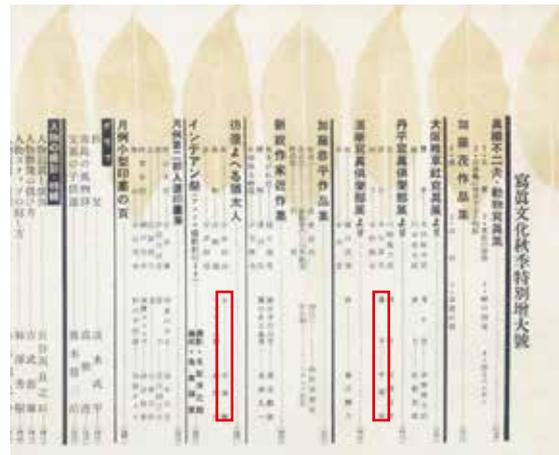
この時、神戸で撮影された写真は同年5月、大阪朝日会館で行われた写真展「第23回丹平展」で「流氓（るぼう）ユダヤ」と題して発表された。その後『寫眞文化』昭和16年10月号に掲載されている。



『寫眞文化』1941年10月号  
(国会図書館デジタルコレクションより)



『寫眞文化』1941年10月号に手塚葵の作品が掲載されている。(左ページ)映っている建物は神戸猶太協会と思われ、ダビデの星が掲げられている。右ページは安井仲治撮影。



『寫眞文化』1941年10月号目次  
「丹平寫眞俱樂部展より」に「曇日」、「彷徨よへる猶太人 (ユダヤ) 」に「女」と題して手塚葵の作品が掲載されている。

年月日	概
昭和十九年十一月	<p>敵艦 方十四方面軍兵站監部 指揮 方十四方面軍經理部長 編成 方三十師團の収買にして(今師團の現地自衛を任務とす) 平壤より南進の途程 北サンフェルナンドに上陸し、各地に於て臨時第三開拓勤務隊を編成す (全頁慰勞上陸す)</p> <p>海凌の有無 無し 敵馬又は派遣の有無 無し 行動概要 (本部及び方二十三中隊) 本部 部隊長 連少佐 黒柳伸右 以下六九名 方二十三中隊 基干大隊 藤原 實 以下二九五名 方二十三中隊 主中尉 寺澤 繁 以下一九五名 (方三、方四、方五中隊) 方二十三中隊長 王中尉 伊吹隆五郎 以下一九五名 方四中隊長 王中尉 由里正太郎 以下一九五名</p>

臨時第三開拓勤務隊(尚武四三六)部隊略歴

年月日	概
昭和十九年十一月	<p>平壤出発 釜山出発 新海 五公 寄港 北サンフェルナンド上陸 敵艦可撃破として遊及出発ルン島北サンフェルナンドに上陸の急務成バザ オギヤンダン地区に於て米戦車の収買に任ず 終戦に付テ戦斗停止 ✓往存者は復員</p>

臨時第三開拓勤務隊 部隊略歴  
尚武 四三六

手塚葵が所属した部隊の行動略歴。昭和十九年以降に朝鮮平壤からフィリピンへ派遣され同地で終戦を迎えたことが記されている。(国立公文書館「アジア歴史資料センター」webサイトより「臨時第三開拓勤務隊(尚武436)部隊略歴」)



のちあつて集に下上の堤突、で最光らすとんれ照を堤突一第港船戸神まいが丸根箱の社金船郵木、日の朝〇二四〇一船巨の船航洲歐、機算  
都京はに日の出船でのるす船乗らか港戸神く多上宜便は客船がらあはてしと船起を港置積は船航洲歐の船郵々仰、るあで々人のり客見客船は  
間の衆群、それか引にう々の船の船物がブーテ紙の色玉はに間の人るるも造、人ら送、るす間差が人送見し特運を車列道直に間線引堤突と  
《都報興》、るあでブーテのそれたつ関くし寂、は線るえ見く白に



一し有を栄一艇乃丸根木々各てし出を堤突の木四、くき大る類模模の甚は港船戸神たれら作て立理を港野小の尻川田牛光戸神、堤突三第  
各々船運船の用専の軟分等運線運海東へ設を機回運上る女大、はに上堤突、る来出がとこるむしせ船製々々製四に積岸側船を船汽の船埠高  
機岸側堤突三第は置置、る来出が事るむしせ船移てつよにル、へ備を基四十機重起の機五、一方揚る依に力電はに機岸つ且し運に堤突  
ひ用に船客貿易貿外も港は堤突の此、るあで機重起力電動可はのもの形チア中央、で垂上は物運の手右、てのもたし示を態状船製るけ於に  
《盛重本興》、るあでのるるら

『日本地理体系7巻 近畿篇』（昭和4年・改造社）より。上は第一突堤から出航する箱根丸。下は第三突堤に着岸中の香港丸で、写真中央のアーチ型の構造物は可動電力起重機で、レールによって移動することができた。また、船の乗降用のタラップもあったという。解説によると第三突堤は主に外国貿易客船用だった。

『アドルフに告ぐ』第20章でエリザが神戸港に到着するシーンはこれを基に描かれている。

昭和16年7月、手塚繁は応召し、陸軍主計少尉として出征した。宝塚市川面四丁目の皇太神社で手塚繁の壮行会が行われた。金筋三本に星一つの少尉の肩章を付けた真新しい軍服を着て長靴を履き、腰にサーベルを提げて、村民を前に挨拶をした。子ども達には「母親の言うことよく聞いて、我が儘を言わずによく勉強するように」と簡単な訓示を残した。その後一時帰国を除いて昭和21年1月に復員するまで、四年半にわたる父親不在の少年時代を手塚治虫は過ごすことになる。

## 手塚治虫と戦争

昭和16（1941）年4月、手塚治虫は大阪府立北野中学校に進学する。入学試験は口頭試問（面接試験）のみであった。当時校長を務めた長坂五郎は自由主義でおおらかな人柄であった。しかし、同年12月に太平洋戦争が始まり、次第に学校生活での戦時色も濃くなっていく。

手塚は級友を自宅に招き、昆虫採集の手ほどきをするようになる。やがて意気投合した同級生の今中宏、林久男の三人で動物同好会を結成して研究誌を発行することになった。手塚治虫は「昆虫と戦争」をテーマに研究論文を執筆する。内容は「伝書鳩」は目立って敵に見つかる可能性が高いので「伝書蜂」はどうだろう、というもの。

今中宏は老舗和菓子店・鶴屋八幡の御曹司であった。店にある邦文タイプライターで文章を打ち印刷。表紙画はカラー印刷できないため、手塚が同じ絵を5枚描き、製本し、クラス内で回覧した。創刊号の表紙は南米に生息するフクロチョウの水彩画であった。『動物の世界』は2号まで発行したものの、そこで今中が抜けることになり、林と手塚の二人だけの同好会となった。二人の興味は昆虫だけとなったので「六稜昆虫



北野中学1年3組集合写真

前から2列目右から4番目が手塚治虫。その隣りが担任の岡島吉郎。最前列右から3番目が林久男。

（写真提供：六稜同窓会）

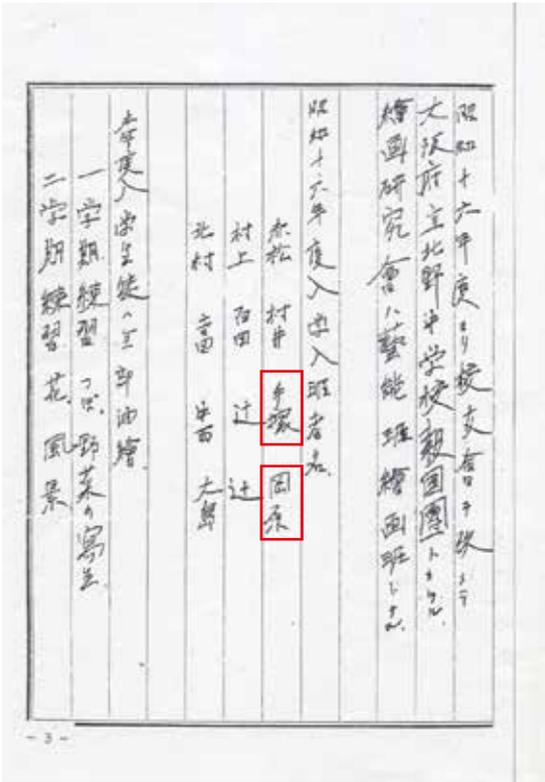
研究会」と会の名称を改め、同人誌『昆虫の世界』を発行した。二人の同人活動は中学四年まで続いたが、戦局が悪化する中、中断を余技なくされ、『昆虫の世界』は昭和19年6月の11号の発行をもって休刊する。

「このままでは、吹田も宝塚もいつ空襲に遭うか解らない。二人で半分ずつ分ければどちらか片方が残るであろう。」

幸いどちらの自宅も空襲で焼けることはなかったが、手塚治虫は、度重なる転居の内に親友との想い出の品を紛失してしまった。一方で林久男の手元に残ったものは、2011年5月、母校の大阪府立北野高等学校の六稜同窓会に寄贈され、六稜会館に保存されている。

手塚の絵の才能を認めたのが、一年三組で担任を務めた岡島吉郎であった。美術教師である岡島は、美術部でも顧問を務める。手塚の中学三年の通信簿の図画の欄には、「優・良・可」の三段階評価で「秀」と書かれたほど優れていた。美術部で手塚と一緒にだった岡原進さんはこのように語る。

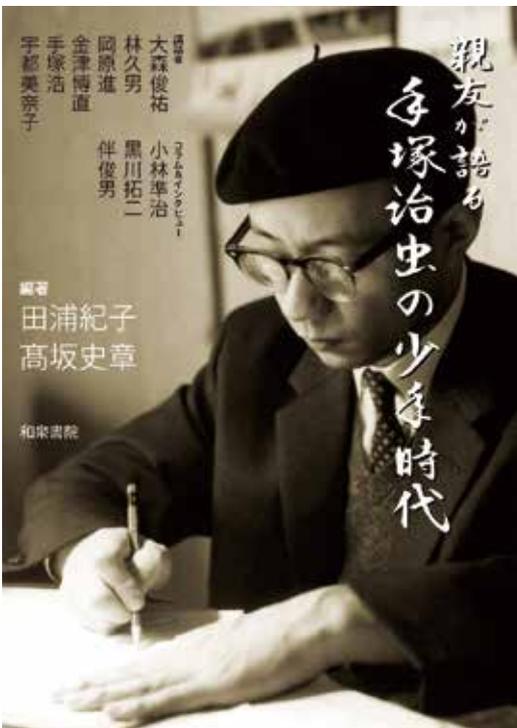
「手塚君の話では美術部の岡島吉郎先生は、とても理解があったと言われていますが、その頃は厳しい先生でした。手塚君は、人付き合いが上手なので「今の僕があるのは岡島先生のおかげ」というようなことを語っていますが、一年生の頃は、よく怒られました。美術部では油絵を描いた上からよく直されました。しかし、戦時中で、二年、三年になると授業で絵を描くどころじゃなくなりました。」



北野中学時代の美術部の「昭和十六年度入班者名」の中に「手塚」と「岡原」の名前がある。

岡原は北野中学を三年で中退し、志願兵として出征する。岡原の父の岡原寛は北野中学でも有名な陸軍少将で演説の名手として知られた。『アドルフに告ぐ』に登場する本多大佐は、岡原の父親と面影が似ているという。

岡原は昭和20年8月15日の敗戦をシンガポールで迎える。イギリス軍の捕虜となり無人島で暮らした後に日本に生還し、戦後はカメラマンとして活動する。昭和41(1966)年『教育大阪』の取材で手塚と再会し、その際に撮影した若き日の手塚治虫のポートレートが残る。この時、手塚が岡原に語った言葉は「僕は耕されていない荒地を歩くのが好きなんだ」であった。決められた人生のレールにとらわれることなく、パイオニアとして常に第一線でいたい。手塚は自分の手掛けるアニメーションへの意気込みを、このような表現で旧友に語ったのである。



田浦紀子・高坂史章編著『親友が語る手塚治虫の少年時代』（和泉書院・2017年）  
書影写真は岡原進撮影。  
題字は金津博直。

昭和19（1944）年9月に動員令が出たことにより、手塚の所属する四年一組の内、四分の三は中津の大阪石綿工業大阪工場へ通年動員となる。手塚の担当はスレートを運搬するためのトロッコを押す係であった。動員中も漫画を描いていた手塚は、なんとか自分の漫画を見てもらうために工場のトイレに貼りだした。

級友であった金津博直さんは、当時のことを語る。

「通年動員中、淀川の堤防の土手の上で銃剣術の授業がありました。木銃で藁人形をエイと突きます。手塚君は教練が嫌いで、よく学校をさぼって朝日会館に映画を観に行っていました。手塚君は脱衣箱の後ろの倉庫の横に隠れて漫画を描いていました。その漫画が級友のところにもまわってきて、皆、休憩の間に読みました。手塚君は当時、『幽霊男』という漫画を描いていました。『紙の砦』『ゴッドファーザーの息子』『ゼフィ



大阪石綿でのスナップ。後列左端が手塚治虫  
（写真提供：葛野兼一）

ルス』『アドルフに告ぐ』などは、北野中学や通年動員の頃の戦争体験がもとになっています。動員中、隠れて漫画を描き、作品を見てもらうために、一時トイレに貼っていたという話も事実です。ただ、『紙の砦』の中に火の見櫓に登って敵機の監視をしていた話がありますが、あれは創作です。会社の倉庫の二階から少し屋上に出るところがあったから、それを誇張したものだと思います。」

通年動員は北野中学卒業後の昭和20年4月以降も続いたが、6月に大阪空襲により工場が被災する。阪急電車も止まったため、工場のある大阪の中津から自宅の宝塚まで延々歩いて帰宅する。後にこのエピソードを『紙の砦』や『どついたれ』で描いている。



北野中学4年1組集合写真（前から2列目右から5番目が手塚治虫。最後列右から5番目が金津博直。  
（写真提供：六稜同窓会）



旧阪急梅田駅コンコース (2005年)



竣工当時の阪急梅田駅コンコース  
(『建築と社会』第15巻第2号 昭和7年より)

『紙の砦』のラストは、昭和20年8月15日、戦争が終わり、主人公の大寒鉄郎が大阪の街の明かりを見て感動するシーンで締めくくられる。「あかりがついているぞっ、あかりがついていても爆撃はされない。やっぱり終わったんだ。」

大寒鉄郎が、戦争が終わったことを実感するシーンで描かれている場所は、手塚治虫が大阪・中之島にあった大阪大学に通学するために毎日通っていた、阪急梅田駅のコンコースである。手塚は、エッセイでこのように書いている。

ぼくはその夜、自宅の宝塚から、阪急電車に乗って、大阪へでいった。車内はガランとして幽霊電車のようにさみしかった。

「あっ、大阪の町に灯りがついている！」  
ぼくは目を見はった。

阪急百貨店のシャンデリアが目もくらむばかりに輝いている。何年ぶ

りだろう！灯りがついたのは。

「ああ、ぼくは生き残ったんだ。幸福だ」

これが平和というものなんだ！

(『COM』・1968年1月号所収「ぼくのまんが記 戦後児童まんが史1」)

『アドルフに告ぐ』では、第28章から34章で、激動の昭和20年が描かれている。神戸空襲で、神戸北野にあったカウフマン邸は焼失する。避難中、由季江は峠の子を身籠っていることを告白する。しかし防空壕の崩落で頭を強打したことで、由季江は意識不明の重体に陥る。由季江を助けたい一心で、大阪・帝塚山の本多大佐の自宅までたどり着くが、そこへ秘密文書を探しに、アドルフ・カウフマンが現れる。徹夜の捜査の末、本多邸の庭から文書が発見された。しかし翌朝の朝刊によって報らされたのは、ヒットラー総統の自決とドイツの降伏であった。茫然自失するアドルフに向かって、峠は母・由季江の容態が重篤であることを知らせる。母を抱きしめるアドルフだが、応えることはなかった。アドルフは峠に残り残して去っていく。

「さよなら、ぼくはすべてに希望をうしなった。だが死にはしない。」

「ママをくれぐれも頼む…おやじさん！」

本多大佐の計らいで由季江を阪大病院へ入院させるも意識は戻らなかった。戦後、帝王切開で生まれた娘を由と名付ける。

『アドルフに告ぐ』の終盤で舞台となる堂島の大阪帝国大学附属病院は、手塚治虫が医学を学んだ学舎であった。

昭和21年1月、手塚治虫は毎日新聞社が発行する「少国民新聞」に連載された『マアチャンの日記帳』で漫画家デビューを果たす。ここから



大阪大学医学部附属病院（昭和12年頃）



大阪大学医学部基礎学舎（昭和12年頃）

漫画家と医学生としての二足の草鞋を履くことになる。同月、父・手塚 粲は漸く宝塚に帰郷する。手塚粲が最後に居た戦地はフィリピンやルソン島で、現地でマラリアに罹り、復員してからもその後遺症が長く続いたという。まだ十代の治虫の肩には一家五人の生活がかかっていた。

## 『アドルフに告ぐ』とその時代

『アドルフに告ぐ』は、作者の手塚治虫の中では戦後の構想もあったものの、手塚の入院により連載が三か月中断したため、戦後の展開は駆け足で進むことになる。

第34章では昭和23（1948）年に峠草平が福井県小浜市を訪れ、小城典子、仁川警部の娘三重子と飲み屋の女将・お桂と再会する。峠は眩く。

「日本中の人間が戦争で大事なものを失った……それでもなにかを期

待して精一杯生きてる人間てのはすばらしい」

1973年、主人公である二人のアドルフは互いに父の敵、妻子の敵として対決し、カウフマンはカミルの手によって倒れる。

「あの世でおれのパパにあやまってこい……また来世で会おう」

第36章は第1章と同じ1983年で締めくくられる。峠草平はイスラエルに住むカミルの妻・エリザを訪ね「アドルフに告ぐ」という小説を出版したい、と原稿を見せる。

「最後のアドルフが死んだ今、この物語を子孫たちにおくる」

カミルの墓の前で峠が静かに花を手向けるシーンでこの物語は終わる。

1983年1月から文藝春秋が発行する『週刊文春』で『アドルフに告ぐ』の連載が始まった。毎週10ページの連載である。連載開始前にアシスタント達を集めて、ベルリン・オリンピックの記録映画「民族の祭典」の特別上映会をするなど、手塚の作品に対する意気込みは大変なものであった。

当時、手塚のチーフアシスタントを務めていた伴俊男さんは、このように語る。

「アドルフの時、先生が背景の指定をしながら珍しく「僕の子どもの頃の街なんだ」という意味のことをポツリとおっしゃっていました。何か思い出されていたのでしょうか。僕の母親は手塚先生の一つ上で、僕が小さい頃はたまに戦争の話をしました。食べるものが無くてその辺の野草まで食べたこと、親戚兄弟が多かったけど戦争でほとんど亡くなったこと。父親は大正生まれでしたが、ビルマに兵隊に行きました。奇跡のように無事に帰ってきたのですが、戦争のことは全然話しませんでした。『アドルフに告ぐ』を読むといつも両親の戦争体験とダブらせてし

まいます。手塚先生のお父様も出征されていたそうですが、当時こんな体験をした日本人はたくさんおられたでしょう。『アドルフに告ぐ』で手塚先生は、戦争の悲惨さと正義の名のもとに戦争に走った人間の本当の恐ろしさを描きたかったのだと思います。」



『アドルフに告ぐ』制作中の原稿。東京・高田馬場のセブンビル・手塚プロダクション漫画制作室にて。（写真提供：伴俊男）

『アドルフに告ぐ』の担当編集者であった文藝春秋の池田幹生さんは当時のことを語る。

「連載時も担当で、営業でも手塚先生を担当することができたのは、非常に恵まれていたと思います。手塚先生は最初の構想時よりパレスチナのくだりが消化不良になってしまったのを悔しがっていました。カミナが日本からパレスチナに行った経緯が描けなかったですからね。二人のアドルフの対決は、手塚先生が最初から描きたかったラストなのですが、希望を聞いていると、連載が際限なく長くなるわけです。1984年11月に手塚先生が入院したため、3か月休載になりました。うちの編

集長が変わって「あと何回かで連載を終わらせよう」という話になりました。それで、連載で描ききれなかったシーンを単行本で描き足して完結させる形となりました。手塚先生は「これで文春の漫画賞取れませんか？」って言っていたのですが、二回同じ人に漫画賞をあげたことがないんです。菊池寛賞をあげたかったですよね。いい作品に巡り合えました。『アドルフに告ぐ』は手塚先生の「白鳥の歌」だと思っています。」

同時期に小学館の『ビッグコミック』で連載された『陽だまりの樹』と共に『アドルフに告ぐ』は手塚の後期の代表作となる。好調な仕事を抱える一方で、1983年1月4日、理解者であった母・手塚文子が死去する。享年74歳であった。その三年後の1986年5月14日に父・手塚繁は86歳で死去する。

当時手塚のアシスタントを務めていた野村正さんはこのように語る。「夜中の2時くらいに先生のお父様が亡くなられたという知らせが来ました。先生は静かに「そうですか…」と言い、それでも翌朝『ユニコ』のカラー原稿が仕上がっていたのを見た時はプロだと思いましたね。」手塚治虫が死去したのはさらに三年後の1989年2月9日であった。

『アドルフに告ぐ』の連載が始まった1983年1月15日、手塚は東京都東久留米市の成人式の式典に招かれ講演を行った。新成人を前にアトムやブラック・ジャック、当時連載中だった『陽だまりの樹』の伊武谷万二郎のイラストなどを次々に描いた。この時に手塚が語った言葉は「人を信じよ、しかし人は信じるな」であった。大きく板書した後、続けて手塚はこう語った。

「四方八方敵だらけの厳しい社会の荒波を乗り越えていくには、「人



東久留米市役所で行われた1983年の成人式で講演する手塚治虫  
(写真提供：下崎闊)

を信じるな」という戒めを忘れてはならないでしょう。そして、私が戦争にいつか平和な世界が来ることを信じていたように、より良い世界の夢を描くことはとりもなおさず「人を信じ」なければできないことです。相反する二つの言葉ですが、個人の生活においては用心をしながら自ら望む道を通り走るような心がけねばならないと同時に、人間すべてを信じ互いに励ましあった、よりよい社会の実現のための核をつくっていただきたいと思います。」

『アドルフに告ぐ』の「著者インタビュー」で、手塚治虫は本作についてこのように語っている。

「今の子ども達は、第二次大戦も、日露戦争も関ヶ原の戦いも、歴史の同じレベルでとらえているんですよ。でも、僕にとっては歴史じゃなく現実だった。戦争の語り部が年々減っていくので僕なりに漫画で伝えて、ケリをつけたかったんですよ。」

「戦争の現場を描くと、女性や子どもがおろそかになるので、二人のアドルフという子どもを中心とした図式にしたのです。」

(講談社 手塚治虫文庫全集『アドルフに告ぐ』3巻所収。初出1986年3月13日号『女性セブン』「著者インタビュー」)

代表作『鉄腕アトム』で、手塚治虫はロボットと人間のディスコミュニケーションを描いている。子ども漫画やテレビアニメの中では、「正義の味方」のアトムは受けても、ロボットの味方をして人間と敵対するアトムは人気をなくしていく。そこで「正義」とは何か、正義とは突き詰めればエゴイズムではないか、と自問自答する。人にはそれぞれの正義があつて立場が違ふと考えも変わる。相手を理解して、それが本当に正義なのかよく考えなければならぬ。戦前戦中戦後を生き抜いてきた中で、国家が掲げた「正義」により失われた個人の尊厳や、戦争の悲惨さを身に染みて感じてきた手塚治虫だからこそ、後年になって迷いなく描いた作品が『アドルフに告ぐ』であった。『アドルフに告ぐ』はまさに手塚治虫の総決算なのである。

## 取材協力・資料提供(敬称略)

手塚浩 宇都美奈子 大森俊祐 林久男 岡原進 金津博直 葛野兼一  
松山壽子 伴俊男 野村正 出雲公三 上野義幸 吉住浩一 関口武美  
坪田文太 木本佳子 下崎闊 池田幹生 古徳稔 松谷孝征 谷卓司  
高坂史章

## 主な参考文献

手塚治虫『アドルフに告ぐ』(初出『週刊文春』1983年～1985年、  
文藝春秋ハードカバー版・1985年、文春コミックス版・1988年、文  
春文庫版・1992年、講談社手塚治虫漫画全集版1996年、講談社手塚  
治虫文庫全集版・2010年)  
手塚治虫『アドルフに告ぐ(オリジナル版)』(国書刊行会・2020年)  
手塚治虫『新・聊斎志異 女郎蜘蛛』(初出少年画報社『週刊少年キン  
グ』、講談社手塚治虫漫画全集『タイガーブックス4』1979年等所収)  
手塚治虫『紙の砦』(初出少年画報社『週刊少年キング』1974年、大  
社・1977年)  
手塚治虫『ゴッドファーザーの息子』(初出集英社・『別冊少年ジャンプ』  
1973年、大社・1977年『紙の砦』所収)  
手塚治虫『ゼフィルス』(初出小学館『週刊少年サンデー』1971年、講  
談社手塚治虫漫画全集『タイガーブックス6』1980年等収録)  
手塚治虫『どついたれ』(初出集英社『週刊ヤングジャンプ』1979年～  
1980年、集英社・1990年)  
手塚治虫『陽だまりの樹』(初出小学館『ビッグコミック』1981年～  
1986年、ビッグコミックス版・1983年～1987年、小学館叢書  
版・1988年～1989年)  
手塚治虫 エッセイ「私の宝塚」(講談社手塚治虫漫画全集『手塚治虫エッ

セイ集6』1997年所収)

手塚治虫 エッセイ「ぼくのまんが記戦後児童まんが史1」(初出『CO  
M』1968年1月号)

手塚悦子『夫・手塚治虫とともに―木洩れ日に生きる』(講談社・1995年)

手塚浩「治虫とTAKARAZUKAと俺」(『タカラヅカという夢』青弓  
社・2014年所収)

NHK「ファミリーヒストリー 手塚眞 父は漫画の神様 ルーツは平安の武  
将?」2016年2月12日放送

『大阪画報』(1928年) (国会図書館デジタルコレクション)

『寫眞文化』1941年10月号 (国会図書館デジタルコレクション)

『丹平写真倶楽部光(日本写真史の至宝)』(国書刊行会・2006年)

『大阪人』2002年10月号 特集「昭和の前衛写真―丹平寫眞倶楽部」

『レトロ・モダン 神戸―中山岩太たちが遺した戦後の神戸』第4章 もう  
ひとつの「神戸風景」―「流氓ユダヤ」と戦中から終戦後にかけての神戸  
(兵庫県立美術館・2010年)

『朝日新聞の秘蔵写真が語る戦争』(朝日新聞社・2009年)

『一億人の昭和史』(毎日新聞社・1975年～1977年)

国立公文書館「アジア歴史資料センター」WEBサイト

<https://www.jacar.go.jp/>

『北野中学の思い出』(第59回同窓生「北野中学の思い出」刊行委員会・  
1985年)

伴俊男『手塚治虫物語』(朝日新聞社・1992年)

泉谷迪『手塚治虫少年の実像』(人文書院・2003年)

竹内オサム『手塚治虫 アーチストになるな』(ミネルヴァ書房・2008年)

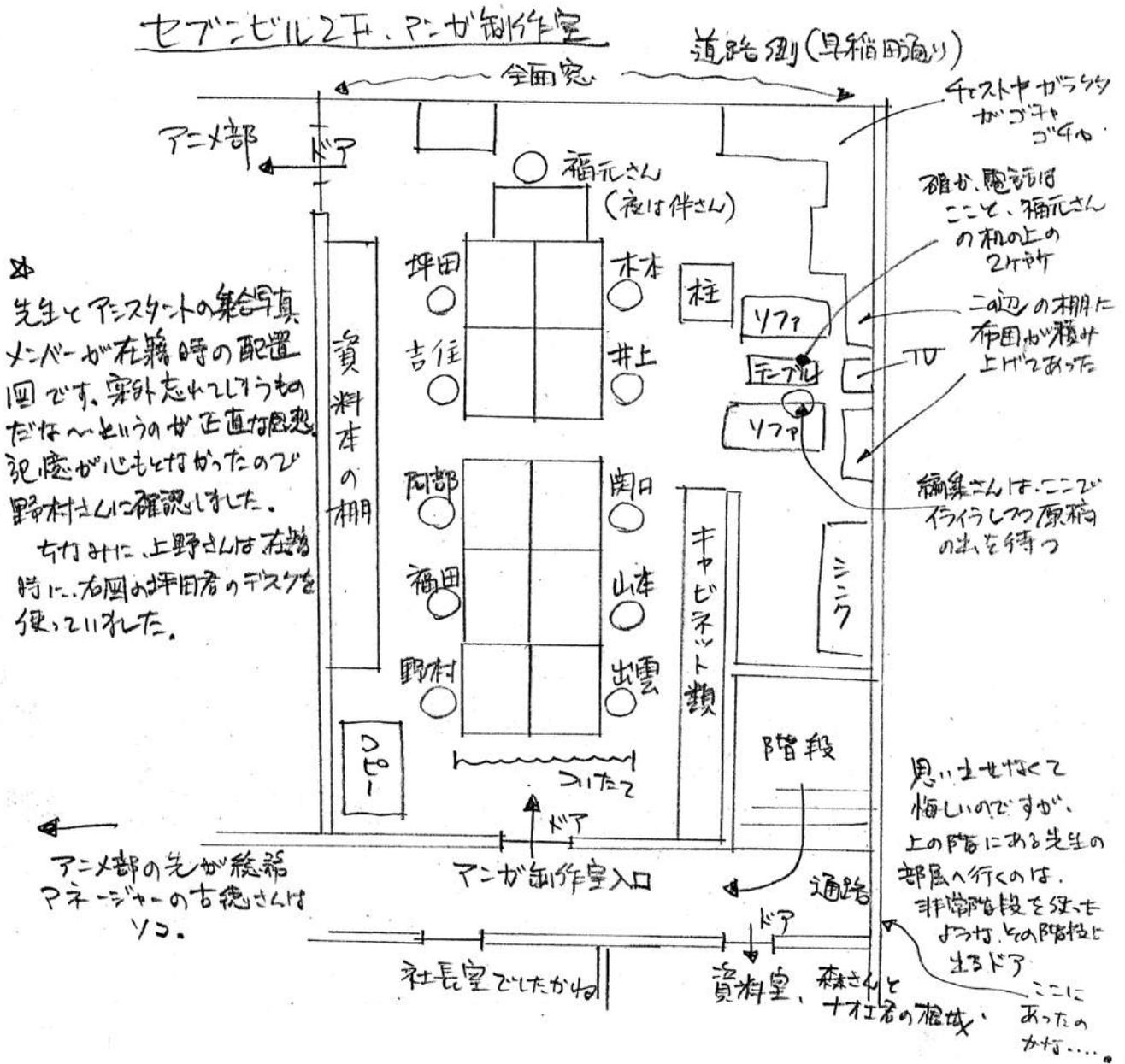
田浦紀子・高坂史章『親友が語る手塚治虫の少年時代』(和泉書院・  
2017年)



高田馬場・セブンビル4階。奥が手塚治虫の部屋だった。



手塚プロ漫画制作室。奥が伴俊男さん。



1984年頃の東京・高田馬場セブンビル2階・手塚プロ漫画制作室の配置図 (作画：出雲公三)

「漫画の神様」手塚治虫のルーツは信州上田にあった!! 令和3年度増補版

令和四年二月

発行者 上原榮治

上田市吉田五六二一

携帯 〇九〇―四四六一―五五九六

写真撮影 (手塚吉兵衛君霊碑) 山辺睦夫

題字 (アドルフに告ぐとその時代) 木南精示

発行所 有限会社グリーン美術出版

長野県東御市加沢五七九一

TEL 〇二六八―七一一〇八四〇

Fax 〇二六八―六四一五八〇〇

非売品

上田市わがまち魅力アップ応援事業





上田市 安楽寺 八角三重塔（国宝）

撮影：坂口浩氏

令和3年度

上田市わがまち魅力アップ応援事業